

2019 こです HOKKAIDO

Collected papers
Domestic Science
Studies

北海道高等学校長協会家庭部会

2019 こそす HOKKAIDO 【平成30年度版】

目 次

○	巻頭挨拶						
	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	吉 田 岳 夫	1			
○	挨 拶						
	北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班	指導主事	近 藤 麻理子 様	2			
I	平成30年度北海道高等学校長協会家庭部会活動報告						
◆	家庭部会の組織・事業内容等						
	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	吉 田 岳 夫	3			
◆	(財)全国高等学校家庭科教育振興会及び同北海道地区校長会報告						
	北海道高等学校長協会家庭部会長	北海道江別高等学校長	吉 田 岳 夫	5			
◆	全国福祉高等学校長会第24回総会・研究協議会参加報告						
	全国福祉高等学校長会理事	函館大妻高等学校長	池 田 延 己	7			
◆	北海道高等学校家庭科教育研究協議会企画委員会報告						
1	第67回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて						
	北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長						
		北海道弟子屈高等学校長	宮 崎 円	8			
2	オリエンテーション						
	北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長						
		北海道弟子屈高等学校長	宮 崎 円	10			
3	講 義 「新学習指導要領について」						
	北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班	指導主事	近 藤 麻理子 様	12			
4	研究発表						
□	提言1 テーマ	義務教育段階における学習状況を踏まえた、学習指導や学習評価の改善・充実		13			
		北海道天塩高等学校	教諭 片 桐 由 貴				
□	提言2 テーマ	高齢者の生活と福祉について考える授業の実践と評価の工夫・改善 ～介護計画作成から学ぶ地域の福祉サービスの現状と高齢者の気持ち～		14			
		北海道南茅部高等学校	教諭 野 田 敬 子				
□	提言3 テーマ	教科間連携の実践 ～蘭越町の特産品を使った商品開発について～		15			
		北海道蘭越高等学校	教諭 松 下 万里音				
5	分科会報告						
□	第1分科会報告	北海道留萌高等学校	教諭 奈良岡 有 紀	16			
□	第2分科会報告	市立札幌新川高等学校	教諭 柿 澤 小百合	17			
□	第3分科会報告	北海道富良野緑峰高等学校	教諭 佐 藤 有 紀	18			

6 平成30年度第67回北海道高等学校家庭科教育研究協議会講評

北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班 指導主事 近 藤 麻理子 様 19

7 グループ別体験研修講座報告

- | | | | | | |
|--|-------------|----|-----|-----|----|
| ☐ A 食育セミナー | 北海道函館中部高等学校 | 教諭 | 石 川 | 佳寿美 | 20 |
| ☐ B 住生活セミナー | 北海道留萌高等学校 | 教諭 | 奈良岡 | 有 紀 | 21 |
| ☐ C 家庭科技術検定
被服セミナー | 北海道標茶高等学校 | 教諭 | 林 | 実 里 | 22 |
| ☐ D 消費生活セミナー | 北海道清水高等学校 | 教諭 | 種 畑 | 幸 子 | 23 |

◆ 北海道高等学校長協会家庭部会調査研究委員会報告

調査研究委員長 北海道登別青嶺高等学校長 井 上 明 子 24

II 平成30年度北海道高等学校家庭クラブ連盟活動報告

1 北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道高等学校家庭クラブ連盟成人会長

北海道丘珠高等学校長 林 裕 司 26

2 第59回全国高等学校家庭クラブ連盟指導者養成講座に参加して

北海道札幌南高等学校 教諭 高 橋 あ き 27

3 第66回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会北海道代表出場校として

- | | | | | | |
|--------------------------------------|-------------|----|-----|-----|----|
| ☐ ホームプロジェクトの部 | 北海道札幌北高等学校 | 教諭 | 松 本 | 奈 巳 | 28 |
| ☐ 学校家庭クラブ活動の部 | 北海道名寄産業高等学校 | 教諭 | 内 田 | 恵 子 | 29 |

4 第67回北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会を終えて

北海道倶知安高等学校 教諭 渋 井 美和子 30

III 平成30年度北海道家庭科技術検定委員会活動報告

1 家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員会委員長

北海道江別高等学校長 吉 田 岳 夫 31

2 家庭科保育技術検定全国専門委員会に参加して

- | | | | | | |
|-------------------------------------|-----------|----|-----|-----|----|
| ☐ 全国専門委員（保育） | 北海道当別高等学校 | 教諭 | 澤 谷 | 郁 恵 | 32 |
|-------------------------------------|-----------|----|-----|-----|----|

3 全国高等学校家庭科被服製作技術検定・食物調理技術検定研究大会に参加して

- | | | | | | |
|-------------------------------------|-------------|----|-----|-----|----|
| ☐ 全国専門委員（食物） | 北海道名寄産業高等学校 | 教諭 | 中 森 | 真 也 | 33 |
| ☐ 全国専門委員（被服） | 北海道江別高等学校 | 教諭 | 高 坂 | 瑠 美 | 34 |

IV 家庭科教育に関する報告

- 1 第56回北海道高等学校教育研究大会教科別集会家庭部会を終えて
事務局 市立札幌清田高等学校 教諭 清野 祥子 35
- 2 第6回北海道高等学校長協会家庭部会意見・体験発表大会を開催して
事務局 北海道江別高等学校 教諭 上野 博美 36
- 3 北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に参加して
 - 発表校《家庭部会》 発表者 北海道三笠高等学校 3年 村木 宏 寧 37
 - 指導者 北海道三笠高等学校 教諭 浦川 智 帆
 - 発表校《福祉部会》 発表者 江陵高等学校 3年 山川 龍 志 38
 - 指導者 江陵高等学校 教諭 田中 孝 賢
- 4 初任段階教員研修Ⅰ年次研修（高等学校）「一般研修」に参加して
北海道湧別高等学校 教諭 加藤 安香音 39
- 5 中堅教諭等資質向上研修（高等学校）第Ⅰ期・第Ⅱ期研修教科別部会（家庭科）に参加して
北海道ニセコ高等学校 教諭 浅川 寛子 40

V 福祉教育等に関する報告

- 1 第18回「[福祉に関する教科・科目設置校研究協議会]」を終えて
北海道留寿都高等学校 教諭 山形 孝宏 41
- 2 第3回北海道高校生介護技術コンテストの開催について
北海道剣淵高等学校 教諭 柏倉 早智子 42
- 3 第7回全国高校生介護技術コンテスト大会に参加して
北海道置戸高等学校 教諭 水谷 愛 43

VI 各地区（ブロック）家庭科研究会の一年間の活動状況 44

- | | | |
|------------|---------|-----------|
| 1 空知管内 | 2 石狩管内 | 3 後志管内 |
| 4 胆振管内 | 5 日高管内 | 6 渡島・檜山地区 |
| 7 上川・名寄地区 | 8 留萌管内 | 9 宗谷管内 |
| 10 オホーツク管内 | 11 十勝管内 | 12 釧根地区 |

VII 特別寄稿

- ◆ 「泣いた赤鬼」～青鬼も泣きますが、幸せです！～
北海道札幌南陵高等学校長 佐々木 淑子 50
- ◆ 家庭科の重要性
北海道当別高等学校長 田村 俊行 51
- 編集後記
北海道当別高等学校長 田村 俊行 52

巻 頭 挨拶

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 吉 田 岳 夫

日頃より、北海道高等学校長協会家庭部会の運営に多大なるご支援を賜り、心よりお礼を申し上げます。今年度は、全道188校の加盟をいただき、予定していた事業の全てを無事に終了することができました。これもひとえに北海道教育委員会、北海道高等学校長協会、加盟いただいた高等学校等の関係各位のご理解とご協力の賜と深く感謝申し上げます。

さて、平成30年3月に高等学校学習指導要領が告示されました。今回の改訂においては、

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を促し、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等を身に付けるカリキュラムについて、資質・能力、見方・考え方、学習過程の三つを軸として構造的に示したものであると言われています。私たち教師の学習観の転換を促すものとも言えるでしょう。このような中、家庭科では、これまでも「自分や家族の生活をよりよくする力や生活の主体者としての力を付ける」ことを目指し、身に付けた知識・技能を活用し実践力を付ける学習を進めてきました。そのため、今改訂では、18歳成人等、時代の変化をとらえつつ、より学びの質を高めていくことが求められています。

生徒の学びの質を高めるための先生方のご指導のもと、今年度も、家庭科を学ぶ北海道の高校生の活躍が随所に見られました。

全国家庭クラブ研究発表大会東京大会では、ホームプロジェクトの部において札幌北高校の清水菜緒さんが、学校家庭クラブ活動の部

において名寄産業高校が、それぞれ東京都教育委員会賞入賞を果たすなど、素晴らしい成果を収めました。

8月に江別高校を会場に実施した第6回家庭部会意見・体験発表大会は、今年度10校の参加があり、三笠高校の村木宏寧さんが最優秀賞となりました。村木さんは、家庭部会代表として出場した産業教育意見・体験発表大会においても最優秀賞を受賞しました。

また、今年度は、食のスペシャリストを育て多くのコンテストで入賞している三笠高校のレストラン「MIKASA COOKING ESSOR」がオープンし、各種メディアで取り上げられました。皆様も機会がありましたら、是非当レストランに出向き、生徒や先生方が丁寧に取り組んでいる様子を実際にご覧いただき、応援していただければ幸いです。

なお、三笠高校以外にも多くの高校が各種コンテストに出場し、家庭科で学んだことを生かして素晴らしい作品を完成し、入賞するなどしました。

このように、真剣に取り組む生徒の姿、日頃から熱心に指導されている家庭科の先生方の姿、その日々の指導のために全道の高等学校家庭科教育研究協議会や高教研家庭部会において熱心に研修される先生方の姿を目の当たりにし、改めて敬意を表しますとともに、家庭部会長の責任の重さを強く感じているところです。

次年度以降も家庭部会に対する皆様のご支援とご協力をお願い申し上げ、巻頭のご挨拶といたします。

新学習指導要領とこれからの家庭科教育

北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班

指導主事 近 藤 麻理子

平成30年3月30日に新学習指導要領が公示されました。今回の学習指導要領改訂の基本的な考え方は、カリキュラム・マネジメントや「主体的・対話的で深い学び」の視点を通じた教育課程の改善をもとにして、学校教育の良さを進化させていくことです。

この「主体的な学び」とは子どもが自ら課題意識を持って、学習に取り組む姿を指します。「対話的な学び」とは、知識・技能を活用・発揮し、生徒同士の協働などを取り入れた授業スタイルとされています。こちらについてはすでに実践されている先生も多いかと思います。対話的であるということは、他の生徒や教員などの目の前にいる人とのコミュニケーションだけではなく、自分自身で深く考え、問いかけるという学びも含まれます。「深い学び」とは学びの過程の中で、生活をよりよくする視点で、習得した知識を積極的に活用し、汎用的な知識とするものです。すでに多くの先生方がこの「主体的・対話的で深い学び」を授業の中で、実践されていることと思います。

また新学習指導要領では、家庭科の学習を通して身に付けた知識・技能を活用して「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動等」等、主体的に取り組む問題解決的な学習の一層の充実を図っております。「ホームプロジェクト」と「学校家庭クラブ活動」は、家庭科で生徒が「主体的・対話的に」学んで得た知識を「深い学び」として自らの糧とし、変容していく様子を可視化できるものです。家庭科の授業の一環として、年間指導計画に位置付けて実施していただき、授業の早い段階において「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ」の意義と実施方法について理解させ、家庭

科の知識や技能を活用して実施することを説明していただくようお願いします。そして家庭科ならではの、より質の高い教育活動の実現を目指していただきたいと思います。

さらに先生方には、学校の教育目標を踏まえて育てたい生徒像を明確にした上で、家庭科の授業に臨んでいただきたいと思います。教師一人一人が個々のスタイルで授業を行うということは、多様な価値観によって生徒の学びが幅広いものとなり、それは高等学校教育における魅力の一つと言えます。しかし、学校全体という視野で見ると、学校の教育目標等が忘れ去られがちになるという、教科の枠を超えた共通の課題が見え、学校の教育目標に向けて全ての教師が足並みをそろえることが求められています。育てたい生徒像がはっきりしていると、授業の組み立てが明確になり、分かりやすい授業となります。また、常に生徒に対して明確に目標を提示し振り返りを行うことで、ぶれのない高い教育効果を生み出すことができます。授業をすることや作品を完成させることが最終的な目標ではなく、教育活動を通してどのような生徒を育てたいのかを学校全体で共有し、積極的な授業の改善・工夫していただくようお願いいたします。

先生方におかれましては、これまでも本道の家庭科教育の充実にご尽力いただいていることに深く感謝申し上げますとともに、今後とも、ご協力をお願いいたします。

最後に、部会長である江別高等学校の吉田岳夫校長先生をはじめ関係各位に、深くお礼を申し上げます、ご挨拶といたします。

I 平成30年度北海道高等学校長協会
家庭部会活動報告

北海道高等学校長協会家庭部会の 組織と今年度の事業内容について

北海道高等学校長協会家庭部会長

(北海道江別高等学校長) 吉 田 岳 夫

今年度、北海道高等学校長協会家庭部会には、188校の加盟をいただきました。加盟並びに各種のご支援とご協力をいただいたことに厚く感謝申し上げます。

今年度の本家庭部会の組織、事業内容等は次の通りとなっています。

■平成30年度 部会の役員構成等

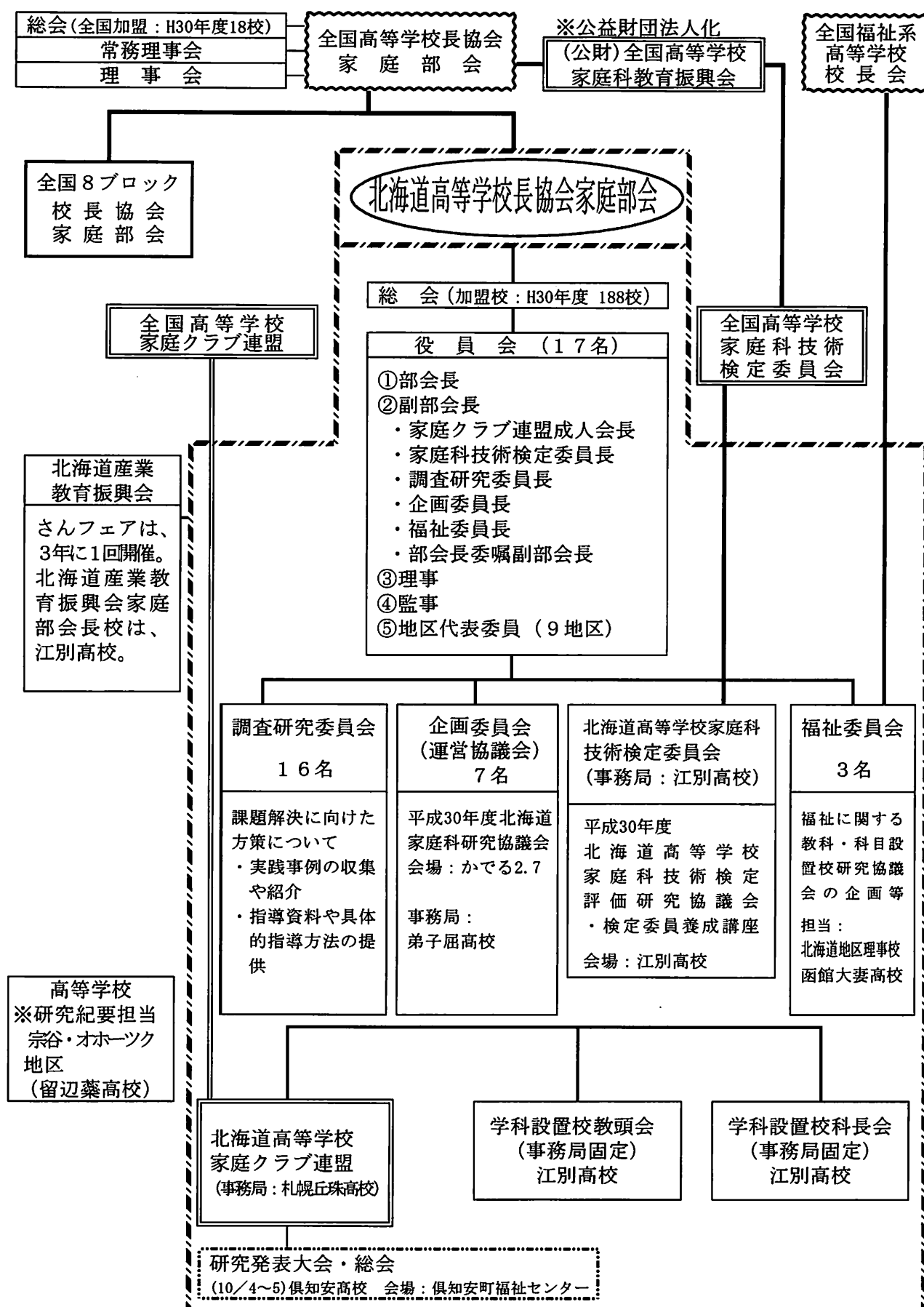
役 職	校長名・学校名	兼務する役職等
部会長	吉 田 岳 夫	全国部会道代表理事
	江 別	全国部会常務理事 全国家庭振興会理事 全国技術検定道理事
副 部会長	佐々木 淑 子	全国部会常務理事
	札幌 南 陵	全国家庭振興会評議員 企画委員、調査研究委員、 高教研部会長
	林 裕 司	全国部会理事
	札幌 丘 珠	調査研究委員 道家庭クラブ成人会長
	井 上 明 子	全国部会理事
	登 別 青 嶺	調査研究委員長、 企画委員、道地区委員
	宮 崎 円 弟	全国部会理事 企画委員長、調査研究委員
監 事	池 田 延 己	全国福祉部会道理事
	函 館 大 妻	全国部会理事 福祉委員長、調査研究 委員、道地区委員
	福 西 一 成	調査研究委員
理 事	渡邊祐美子、千歳北陽	調査研究委員、道地区委員
	林 正憲、野幌	調査研究委員、企画委員
	田村俊行、当別 杉田良二、名寄産業	調査研究委員、企画委員 調査研究委員、企画委員、 道地区委員
	遠藤直樹、三笠	調査研究委員、企画委員、 道地区委員
	坂本浩哉、置戸	福祉委員、調査研究委員、 道地区委員

役 職	校長名・学校名	兼務する役職等
理 事	若宮 栄、江陵	福祉委員、調査研究委員
他の 道地区 委員	飯田知男、倶知安	後志、調査研究委員
	平野道雄、清水	十勝、調査研究委員
	藤井一志、釧明輝	釧根、調査研究委員

■平成30年度 部会の主な事業

月 日	事 業 (会 場)
4/19	家庭科技術検定常任理事会(江別高)
4/20	第1回家庭部会役員研究協議会(ライフォート)
4/27	全国家庭科教育振興会理事会(全国事務局)
5/ 9	平成30年度家庭部会総会(ライフォート)
5/10	道家庭クラブ連盟第1回研究協議会(教育文化会館)
5/21	全国福祉校長会第1回理事会(東京)
"	全国家庭部会、常務理事会、理事会(東京)
5/22	全国家庭部会総会、研究協議会(東京)
7/25・26	全国家庭科実践研究大会福井大会(福井)
7/26・27	全国家庭クラブ連盟研究発表大会(東京)
7/31・8/1	道家庭科教育研究協議会(かでる2・7)
7/31	全国家庭部会北海道地区校長会(")
8/ 1	道家庭科技術検定評価研究協議会(江別高)
"	道家庭科検定委員養成講座(江別高)
8/2・3	全国家庭クラブ連盟指導者養成講座(東京)
8/24	第6回家庭部会意見・体験発表大会(江別高)
"	第3回北海道高校生介護技術コンテスト(北翔大)
10/4・5	全道家庭クラブ研究大会、総会(倶知安)
10/11・12	全国家庭部会秋季研究協議会(大分)
10/16	道高等学校産業教育意見・体験発表大会(江別高)
10/20・21	第28回全国産業教育フェア～山口大会(山口)
11/30	福祉に関する科目設置校研究協議会(留寿都高)
1/10	高教研家庭部会(エルブ・ラザ)
2/ 1	全国常務理事会、理事会(東京)
2/25	道家庭クラブ連盟第2回研究協議会(ライフォート)
"	第2回家庭部会役員研究協議会(ライフォート)

【平成30年度 北海道高等学校長協会家庭部会 組織図】



※ 線 で囲まれた部分は家庭部会の組織や事業等を示す。

(公財) 全国高等学校家庭科教育振興会

全国高等学校長協会家庭部会同北海道地区校長会報告

北海道高等学校長協会家庭部会長
(北海道江別高等学校長) 吉田 岳夫

I 公益財団法人

評議員 佐々木淑子 (札幌南陵)

全国高等学校家庭科教育振興会

○理事会

平成30年5月21日(月) 13:00~14:00

アルカディア市ヶ谷

出席者 財団理事 吉田 岳夫 (江別)

II 全国高等学校長協会家庭部会

○常務理事会

平成30年5月21日(月) 14:10~14:40

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 吉田 岳夫 (江別)

1 報 告

○平成29年度家庭科技術検定受検状況

①被服製作	48,058人
②食物調理	93,152人
計	141,210人
前 年 比	-7,365人
③保 育	110,636人
前 年 比	-7,172人

2 議 事

(1) 平成29年度事業報告

主な事業～家庭科技術検定の実施

(2) 平成29年度収支決算書

▽経常収益 173,234,666円

主な収入～検定事業 144,485,700円

出版事業 22,917,000円

▽経常費用 172,260,720円

(3) 平成30年度事業計画

主な事業～家庭科技術検定の実施

(4) 財団正味財産(平成30年3月31日)

327,501,653円

(5) 理事、評議員の選出

理事長 武正 章

(埼玉県立不動岡)

北海道代表理事 吉田 岳夫 (江別)

1 協議事項

(1) 全国理事会・研究協議会の運営

(2) 総会・研究協議会の運営

(3) 調査研究委員会委員

(4) 家庭部会食物科・調理科高等学校長会
規約の一部改正(案)

2 連絡事項

(1) 第120回秋季研究協議会(大分大会)

(2) 秋季研究協議会研究協議提案者

(3) 第62回家庭科実践研究会(福井大会)

(4) 第10回保育教育研究大会(山口大会)

(5) 第28回全国産業教育フェア(山口大会)

○理事会

平成30年5月21日(月) 14:50~17:20

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 吉田 岳夫 (江別)

1 報告事項

(1) 家庭部会常務理事会報告

(2) 家庭科教育振興会評議員会・理事会報告

2 協議事項

(1) 平成29年度家庭部会事業報告

(2) 平成29年度会計決算報告

▽総収入額 14,830,260円

主な収入～会費 11,292,000円

6,000×1,882校（北海道15校, 昨年比+1）

(3) 平成30年度家庭部会役員・財団役員

【家庭部会・財団理事長】

武正 章（埼玉県立不動岡高等学校長）

【北海道地区常務理事】

吉田 岳夫（江別）

佐々木淑子（札幌南陵）

(4) 平成30年度家庭部会事業計画

(5) 平成30年度家庭部会会計予算

▽総収入額 14,606,313円

主な収入～会費 11,280,000円

6,000×1,880校（北海道18校, 昨年比+3）

主な支出～事業費 7,600,000円

研究協議会負担金 1,200,000円

地区別校長会 900,000円

○総会・研究協議会

平成30年5月22日（火）10:00～16:20

アルカディア市ヶ谷

出席者 全国常務理事 吉田 岳夫（江別）

1 開会式

(1) 理事長挨拶 武正 章

(2) 来賓祝辞

文科省初等中等教育局 高見 太也 氏

産振中央会専務理事 富岡 逸郎 氏

(3) 退任校長表彰 挨拶

2 総会・研究協議会

3 文科省説明「専門職大学・専門職短期大学の制度化について」

文科省高等教育局大学改革官 澁谷 秀行氏

4 講話

文科省初中局教科調査官 市毛 祐子氏

5 研究協議

(1) 「家庭に関する学科における学習の多面的な評価の充実と活用に向けて」

栃木県立真岡北陵高校長 押久保 徹

(2) 「共通教科『家庭』ではぐくむ『生きる力』～主体性を持って協働して学ぶ合う家庭科を目指して～」

神奈川県立座間高校長 小山 修

(3) 「家庭科技術検定の社会的評価を高めるために～質の向上と受検者数の増加を目指して～」

岐阜県立大垣桜高校長 渡辺美智子

(4) 「家庭学科等卒業者の進路状況調査について」

千葉県立佐倉東高校長 釜沼 德行

6 講演

「いのち…それは奇跡～ひとりの産婦人科医からのメッセージ～」

龍ヶ崎済生会病院産婦人科医 陳 央仁 氏

Ⅲ 全国校長会家庭部会北海道地区校長会

1 日時 平成30年7月31日（火）

13:30～15:50

2 会場 道民活動センターかでの2・7

3 次第

進行：北海道弟子屈高等学校長 宮崎 円

(1) 部会長挨拶

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長 吉田 岳夫

(2) 来賓挨拶・説明

全国校長協会家庭部会事務局長

加藤 路子様

(3) 報告

「平成30年度全国高等学校長協会総会・研究協議会（春季大会）等について」

北海道校長協会家庭部会長

北海道江別高等学校長 吉田 岳夫

(4) 協議「平成30年度北海道高等学校長協会家庭部会の今後の活動等について」

(5) 家庭部会校長参加者数 14名

(6) 運営者

北海道弟子屈高等学校長 宮崎 円

全国福祉高等学校第24回総会・研究協議会報告

全国福祉高等学校長会理事

函館大妻高等学校長 池田 延己

福岡大会は福岡県立久留米筑水高校を主管校に、県内16校の協力のもと、「地域福祉における高校教育の役割」と題して、平成30年8月7日～9日の3日間にわたって開催された。

1. 理事会報告 (H30.8.7)

あいさつ、報告・連絡事項に続き、各部会からの協議事項となり、全国産業教育フェア山口大会、生徒体験発表会、社会福祉・介護福祉検定、教員の表彰規定等について協議がなされた。

特に、担当理事を委嘱されている私の方から、全国福祉校長会主催「介護福祉士等に係わる講習会」の進捗状況について、組織化→需要調査→講師依頼→テキスト作成→研修企画→募集開始→研修という具体的なスケジュールを示し、会場の設定や講師の選定などの動きを加速させているという報告をし、協議がなされた。

本講習会（資格代替講習）については、平成20年度～25年度までの時限規定であったため、平成26年度以降実施されていない。資格取得者が定年や転勤で異動があった場合や新卒者を採用した場合等、高校「福祉」の教員免許状だけでは、介護技術や看護に関する領域を教える先生がいなくなる事態も想定されることから、来年度8月19日～30日までの土日を除く10日間、愛知県東海市にある日本福祉大学東海キャンパスにおいて、定員100名～130名の範囲内で、復活させることに決定した。

この講習の修了により、介護福祉士養成の高校において、介護福祉士と看護師等の資格を持っていることと同等と見なされ、安定して介護福祉士養成校を運営できるようになる。なお、2日間5年の実習（内2回の講習受講者は3年）が義務づけられている。次回は5年後の開催となることから、高校「福祉」の教員免許状を所有している先生方はぜひ受講して貰いたい。

2. 大会1日目 総会・研究協議会 (H30.8.8)

開会行事に続き功労者表彰（2名）、教職員表彰（46名）があり、その後『福祉・介護人材確保対策の現状等』と題した、厚生労働省社会・援護局福祉基盤課福祉人材確保対策室片桐昌二氏による基調講演が行われた。特別講演は、久留米大学文学部心理学科教授の安永 悟氏による「協同学習とは何か～主体的な学習が生徒を変える～」と題して行われた。

全国代表5人による生徒体験発表は、東海地区代表の田中愛菜さん（愛知県古知野高校）の『誇り』が最優秀賞（文部科学大臣賞）に輝いた。優秀賞（全国福祉高等学校長会理事長賞）は中国地区代表の広島県立黒瀬高校中重咲良さんの『「心の声」が聴こえる介護』であった。

研究協議会は①授業研究、②現場実習、③資格取得、④進路指導の順に発表された。指導・助言者は久留米大学文学部社会福祉学科門田光司教授が務めた。

1. 大会2日目 校長会総会 (H30.8.9)

平成29年度事業報告、会計決算報告、平成30年度事業計画(案)、平成30年度会計予算(案)が提示され、可決・成立した。

2. 研究協議会

校種別協議会（養成校・科目等履修校）に分かれての研究協議の後、分野別学習会Ⅰ～Ⅳが行われ、活発な意見交換がなされた。

3. 指導・講評

文部科学省初等中等教育局矢幅清司視学官による「地域福祉における高校教育の役割」。

4. 次年度開催地

山口県立周防大島高等学校を主管校に、8月7日～8日の2日間、「山口県健康づくりセンター」開催されることが決定した。

第67回北海道高等学校家庭科教育研究協議会を終えて

北海道高等学校家庭科研究協議会会長

(北海道弟子屈高等学校長) 宮 崎 円

平成30年度第67回北海道高等学校家庭科研究協議会が、7月31日(火)～8月1日(水)の2日間、北海道立道民活動センター「かでる2.7」を主会場として開催されました。

ご来賓として、北海道教育庁学校教育局高校教育課長 山本 明敏 様、全国高等学校長協会家庭部会事務局長 加藤 路子 様にお越しいただきご挨拶を頂戴しました。

また、全体会Ⅰでの「新学習指導要領」に関する講義ならびに全体会Ⅱにおける助言及び講評を、北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班指導主事 近藤 麻理子 様をお願いいたしました。道内の家庭・福祉に関する高等学校の校長先生並びに先生方など100名を超える皆様にご参加いただき、おかげ様で盛会のうちに所期の目的を達成することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、本会は北海道高等学校長協会家庭部会企画委員の校長7名と全道各地より選出された運営研究員24名の先生方及び教頭3名そして事務局(弟子屈高校)3名、計37名で組織され、企画・準備・運営業務を担いました。

【本部研究協議会 組織】 P9に記載

さて、1日目午前中は、開会式・オリエンテーションに続いて全体会Ⅰとし、近藤麻理子指導主事による講義ならびに担当各地区から3つの授業実践が研究発表されました。

近藤麻理子指導主事からは「新学習指導要領について」と題し、次期学習指導要領で育成を目指す資質・能力や改訂のポイントなど全体に係る部分と家庭科として目指す資質・能力や現行との変更点についてご教授いただきました。伝統や文化に関する教育の充実として、和食や和服および和室など日本の伝統的生活文化の継承や消費者教育、防災・安全教育の充実など今後ますます家庭科教育の果たす役割の重要性について認識する機会となりました。

提言については、留萌・宗谷、渡島・檜山、後志の3地区からの発表となりました。留萌・宗谷地区からは天塩高校 片桐由貴先生による中学校と連携した家庭科教育の取り組みについて、渡島・檜山地区からは南茅部高校 野田敬子先生による高齢者の福祉に関して介護計画作成に係る取り組みについて、また後志地区からは蘭越高校 松下万里音先生による家庭科と商業科との連携による商品開発についての取り組みが発表されました。

異校種間の連携、異世代との交流、他教科との教科間連携や地域特産物を利用した商品開発など、次期学習指導要領で謳われている「社会に開かれた教育課程」につながる貴重な実践を提言としてまとめて発表していただきました。

なお、次年度以降は、発表担当地区を2地区としてローテーションが組み直されておりますので、ご確認をお願いいたします。

【提言内容】 P13～P15に記載

午後からは、3つの分科会と校長部会に分かれた研究協議を行いました。3分科会とも午前の研究発表を受け、授業実践例や評価の改善や工夫に関する取り組みなど活発に協議が行われ、大変有意義な分科会となりました。

校長部会では、全国高等学校長協会家庭部会北海道ブロック研究協議会を兼ねていることから、全国高等学校長協会家庭部会ならびに公益財団法人全国高等学校家庭科教育振興会事務局長の加藤 路子 様においでいただき、「全国高等学校家庭科教育の現状と課題」について説明していただきました。また、北海道校長協会家庭部会長(江別高校長) 吉田 岳夫 校長からは、「全国高等学校長協会家庭部会総会・研究協議」等について資料をもとにご報告いただくとともに、次年度10月に札幌で開催予定の全国高等学校長協会家庭部会の秋季研究協議会 北海道大会の準備状況についてもご報告がありました。

分科会終了後は、全体会Ⅱとして再び参加者が集まり、各分科会の報告及び講評が行われました。

各分科会では、今後の指導に生かすことができる充実した協議内容であったことが報告されました。

また、近藤指導主事の講評では、各提言内容についての指導と評価をいただくとともに、家庭科教育の課題についても触れられ、解決に向けては本研究協議会の意義と家庭科教員の研修がいかに重要であるかについても話されました。

【分科会報告】 P16～P18 に記載

【講評】 P19 に記載

2 日目はグループ別体験研修を行いました。昨年度までと同様に A：食育、B：住生活、D：消費生活に加え、C 研修として、昨年度人気が高かった家庭科技術検定セミナーを被服分野で実施しました。A 研修では和食技術に関するデモンストレーションを交えた講義が行われ、プロの技術やその指導に関心が集まっていました。B 研修では、北海道の住まいと防災の基礎知識についてグループワークを取り入れた研修、C 研修では江別高校の先生方の協力のもと、家庭科技術検定被服 4 級の指導方法について実技を交えながらの研修となりました。成人年齢の引き下げにともない消費者教育の重要性が増す中、D 研修では最近の消費者問題について研鑽を深める機会となりました。

なお、それぞれの講座の講師をお引き受けいただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

【体験研修講座報告】 P20～P23 に記載

以上、2 日間の日程で開催された本研究協議会は、充実した研修の時間を提供し、共有することができたようです。新学習指導要領解説が公表され、各校では教育課程の編成準備が始まります。時代に求められる家庭科教育の充実が益々必要となる中、本研究協議会もなお一層、本道の家庭科教育・福祉教育に関わる先生方の資質向上を目指し、さらに実り多き研修・学びの場となるよう努めて生きたいと考えますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げますとともに関係の皆様にも深く感謝申し上げます。

【本研究協議会 組織】

1 役員

部会長	吉 田 岳 夫 (江 別)
会 長	宮 崎 円 (弟 子 屈)
副会長	佐々木 淑 子 (札幌南陵) 田 村 俊 行 (当 別) 井 上 明 子 (登別青嶺) 杉 田 良 二 (名寄産業)
監 事	遠 藤 直 樹 (三 笠) 林 正 憲 (野 幌)

2 運営研究員

石 狩	高 橋 あ き (札 幌 南) 松 本 奈 巳 (札 幌 北) 東 昌 江 (札幌手稲) 高 橋 理 緒 (札幌南陵) 坂 口 真奈美 (札幌厚別) 秋 田 貴 子 (札幌工業) 柿 澤 小百合 (札幌新川) 鈴 木 朋 美 (江 別) 今 多 靖 子 (当 別) 上 原 さゆり (文教大明清)
道 南	石 川 佳寿美 (函館中部) 對 島 珠 望 (函 館 西)
後 志	千 葉 和 代 (余市紅志) 佐 藤 郁 子 (真 狩)
空 知	風 上 沙 織 (美唄尚栄) 高 橋 亜 紀 (奈井江商業)
上 川	佐 藤 有 紀 (富良野緑峰) 中 森 真 也 (名寄産業)
留 萌	奈良岡 有 紀 (留 萌)
宗 谷	佐々木 加奈子 (豊 富)
オホーツク	竹 内 篤 子 (北見柏陽)
日 胆	黒 田 さとみ (厚 真)
十 勝	種 畑 幸 子 (清 水)
釧 根	林 実 里 (標 茶)
教 頭	後 藤 あゆみ (広 尾) 佐 紺 摂 子 (江 別) 佐 野 陽 子 (留 辺 蘂)

3 事務局校 (北海道弟子屈高等学校)

事務局長 (教 頭)	三 浦 知 道
事務局員 (事務長)	清 野 哲 也
事務局員 (教 諭)	佐 藤 美 保

オリエンテーション

北海道高等学校家庭科教育研究協議会会長

(北海道弟子屈高等学校長) 宮 崎 円

本研究協議会開催にあたり、ご多用の中 100 名を超える皆様に全道各地よりお集まりいただき、誠にありがとうございます。昨年度まで、この研究協議会会長をされていた佐々木淑子校長先生より今年度から引き継ぎました、弟子屈高校校長 宮崎です。至らないところが多々あるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。運営研究員一同、力を合わせて運営してまいります。

さて、昨年度の報告をさせていただきたいと思います。平成 29 年度第 66 回北海道高等学校家庭科研究協議会の参加人数につきましては、前年度に比べ参加者が増え、教諭・教頭合わせて 100 名の参加者となりました。参加者の皆様に実施したアンケートからいただいた貴重なご意見を今年度の企画にも生かしました。アンケートの回答から特筆すべき点は、継続して複数年参加していただける先生方が非常に多いということです。全道 200 を超える高等学校がございますが、複数の家庭科教員が配置されている学校が減少し、お一人で教科指導をなされている方が大部分かと思います。ぜひ、今回をはじめとする研修の機会を活用していただき、スキルアップにつなげていただければと思います。また、毎年好評の体験研修講座ですが、昨年は保育の分野で家庭科技術検定の講座を実施し、多くの皆様に体験していただきました。今年度は、それを踏襲し「技術検定研修セミナー」として、被服分野で実施いたします。私たち家庭科教員の使命は、「子どもたちに正しい知識や正確な技術を伝えること」と思っております。ぜひ、家庭科技術検定をとおして、子どもたちに

身につけさせたい知識と技術を、私たち自身が再確認する場としても活用していただければと思います。次年度以降も、この体験研修は継続していく予定です。

次に、会計決算報告です。一般参加者が昨年は例年より多い 100 名となり、例年ほとんど繰越金のないギリギリの会計の中で運営しておりましたが、昨年は 75,000 円が繰越金となりました。参加者数が年度によって増減することが予想されますので、安定した本研究協議会の運営のために活用してまいります。決算報告は、校長協会家庭部会の総会にて、監査・了承済みですので、併せて報告いたします。

さて、本年度の研究主題・研究の観点につきましては、開催要綱に記載のとおりです。これから全体会で行う講義・研究発表・提言などについては、その観点をそれぞれ示しましたのでご確認ください。特に今年度は、学習指導要領の改訂に伴い、近藤麻理子指導主事による「新学習指導要領について」と題したご講義の時間を設定しております。

次に次年度の開催についてもお知らせします。昨年実施いたしましたアンケートから、大多数の皆様が「開催日・会場とも適当である」という回答をいただいております。このことから、次年度も 7 月の最終週に、会場はここ、かでの 2・7 で実施する予定であります。なお、提言の担当地区ですが、今まで 3 地区にお願いしてまいりましたが、学校数の減少に伴いローテーションの回りが早く、提言者の確保に困難を極める地区が出てまいりました。つきましては、次年度以降提言を 2 本としていくこととし、こち

らも家庭部会役員会で了承されております。この結果、次年度の各担当地区は、提言が上川と胆振・日高地区、司会が石狩と釧路・根室地区、また、記録は運営研究員で担当してまいります。なお、新しいローテーション表は5月に行われました第1回運営研究協議会で各地区の運営研究員にお示ししておりますので、各地区で開催されます研究協議会などで次年度以降のローテーションを確認の上、準備を進めていただきたいと思います。

さて、教育全般についてお話させていただきます。平成30年3月に新学習指導要領が告示され、皆様ご存知のとおり高等学校では2022年度より年次進行で実施されていきます。このことについて詳細は、近藤指導主事よりご講義をいただきますが、21世紀を生きてきた私たち、この後21世紀を生き抜く子どもたちを「どのように育てていくのか、何を伝えていくのか」が重要なポイントになっていくかと思います。また、昨今働き方改革が声高に言われています。働き方改革のキーワードの1つに「ワーク・ライフ・バランス」があります。しかし、私たちは何年も前から授業の中で、この言葉を生徒たちに伝えてきているのではないのでしょうか。「ワーク・ライフ・バランスを整えることによって、健康に家庭生活を営み、男性の家事や育児への積極的参加、ひいては男性も女性も同じように社会参加できる社会をめざせたらいいね」と授業で生徒たちに伝えてきました。しかし、「現実だね」ということも私は何度も生徒に申しました。「まだまだ日本の社会を牛耳っている人たちは、男は仕事、女は家庭を守るのが当然と考えるおじ様たちだから、あなたたちが大人になった時に変えていってください。そうしないと社会は変わらない。だから頑張ってくださいね」ということを子

どもたちにずっと伝えてきていました。男性の長時間労働は、同じ土俵に乗るなら女性も同じように働くことを求め、さらに女性には子どもを産み育てることも求められています。その結果、「ワンオペ育児」「子供を出産する前の保活」など、男性も女性も疲弊していく結果となっているのではないのでしょうか。今、やっと社会が長時間労働の是正やワーク・ライフ・バランスをとおして、私たちが子どもたちに教えてきたことに追いついてきたのかな、と感じているところです。正に、21世紀を生き抜く子どもたちの育成とは、このようなことなのかな、と今改めて感じているところです。本日のこの後の提言では、天塩高校 片桐由貴先生からは「小中高の12年間をとおした家庭科の指導について」異なる校種の連携によるどのような子どもたちを育てたいかという観点からの一貫した取り組み。このような取り組みは今後ますます重要になっていくと思います。また、南茅部高校の野田敬子先生からは、高校生と高齢者という異なる世代の交流の中で見出された気づきについての深い学びについて。蘭越高校の松下万里音先生からは、家庭科と商業科のコラボレーションから生まれた教科横断的な取り組みと地域連携についての取り組みが発表されます。どの提言も次期学習指導要領で重要視されていることであります。このようなことを、先生方も日ごろの授業実践をとおして普通に取り組んでいらっしゃる方がたくさんあるかと思います。そういったことに、やっと追いついてきたのかな、ということも感じました。

この2日間の研究協議会が、先生方自身の授業実践の振り返りとなり、次につながる研修になることを期待申し上げ、オリエンテーションといたします。

第67回北海道高等学校家庭科教育研究協議会

講義 「新学習指導要領について」

北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班

指導主事 近 藤 麻理子

新しい学習指導要領が公示され、グローバル化や人口減がますます進むと予想される2030年代に社会人となる子どもたちが、学校で何を学ぶかが示されました。予測不能な社会に向けて、新しい教育の在り方を構築する必要性があり、今回学習指導要領が改定されています。

今までの学習指導要領の特徴は、知識のインプットに重きが置かれており、教育者の視点によるものでした。新しい学習指導要領では、「何ができるようにするか」という学習者の視点へと代わっているのが特徴です。学習者である子どもを中心に考えることで、今後はアウトプット中心の知識や技術の活用、発揮に力点を置いた授業が必要になると言われています。

家庭科の目標については、従前の目標を継承しつつ、社会の変化や持続可能な社会の構築、食育の推進、男女共同参画社会の推進、成年年齢の引き下げ等への対応を一層重視し、生活を主体的に営むために必要な理解と技能を身に付け、課題を解決しようとする実践的な態度を養うことにより、家庭や地域の生活を想像する資質・能力を育成することを目指して設定されています。なお、目標の柱書きには「家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」という家庭科の「見方・考え方」が示されております。また、今回の改定の基本方針を踏まえ、育成を目指す資質、能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学び

に向かう力・人間性等」の3つの柱により明確にし、目標が設定されているのが特徴です。

各学科に共通する教科「家庭」については、必修履修科目を「家庭基礎」（2単位）、「家庭総合」（4単位）の2科目設けています。

内容については、小中高等学校の系統性を踏まえて「家庭基礎」、「家庭総合」とともに内容構成を、「家族・家庭及び福祉」、「衣食住」、「消費生活・環境」に「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」を加えた4つに整理されています。科目の導入として、「生涯の生活設計」の項目を新たに設け、「家族・家庭及び福祉」、「衣食住」、「消費生活・環境」の内容と関連付けるとともに、まとめとしても指導することとしています。また、「ホームプロジェクトと学校家庭クラブの活動」については、家庭科の授業の一環として、年間指導計画に位置付けて実施していただくことになります。「消費生活・環境」については、成年年齢の引き下げに伴い、自立した消費者の育成や若年者が消費者被害に遭わないよう、消費者教育の充実した指導が求められることになりました。消費者庁の「社会への扉」をご活用いただき、契約の重要性や消費者保護の仕組みなどについて、確実なご指導をお願いいたします。

先生方におかれましては、新学習指導要領の理念と学校の教育目標を理解した教育に努めていただき、子どもたちに必要な資質・能力が育成できる授業になっているかどうかを照らし合わせつつ、日々の教育活動に当たっていただきますようお願いいたします。

提言 1 義務教育段階における学習状況を踏まえた、 学習指導や学習評価の改善・充実

北海道天塩高等学校教諭 片 桐 由 貴

1 はじめに

北海道天塩高等学校は、留萌管内最北の全日制普通科の2間口の小規模校である。全学年共通で2年次に「家庭基礎」、3年次には「子どもの発達と保育」を選択教科として学んでいる。

本研究実践の経緯として、天塩町教育研究協議会家庭部会において、①中学校に家庭科専任の教員がいないこと。②言語活動における「話すこと・聞くこと」について、家庭科の授業における効果的な手立の2点が課題である。

この課題について、北海道天塩高等学校、天塩町立天塩中学校、天塩町立啓徳小学校で検討し、小学校から高等学校の12年間の家庭科・家庭分野の系統的な指導計画を作成し、高校家庭科教員による中学校・小学校への乗り入れ授業を計画・実施した。

2 実践内容

- (1) 中学校での乗り入れ授業の実施
- (2) 小学校でのティーム・ティーチング授業の実施
- (3) 第2年生「家庭基礎」(2) 生活の自立及び消費環境 イ被服管理と着装 (4)被服の管理と計画 題材「ボタン付けテスト」
- (4) 第3年生「子どもの発達と保育」(3)子どもの生活 題材「布おもちゃ作り」

3 成果

本時の作業の説明は全体へ行うが、細かな説明と手本を班長のみに行き、班長がグループに説明と手本を見せるという流れで実習を行った。進度も目標以上には進むことはせず、グループで協力し全員が同じ進捗で行うこと、「話すこと・聞くこと」を手立てとして実施した。後半では、どのグループも班長を中心によくま

とまり、苦手な生徒にはグループ全員でサポートし合う姿が多く見られました。技術力の向上のみならず、こちらの意図すること以上にコミュニケーションを図っていた。

4 終わりに

他校種との乗り入れ授業をするにあたって、授業参観もさせていただいたが、小・中学校でのきめ細かな指導を実際に学ぶことができ、自分の授業改善に大きく役立ちった。今回、被服実習の進め方を統一し、班長からグループ毎に説明をするということで、初めて自分の力で作品を完成させた生徒や、苦手だったことができるようになった生徒が多くいて、自己肯定感を高めることができた。

また、班長として、班員に上手く説明が伝わらないこと、伝え方の難しさに戸惑う生徒もいたが、班員に手本を見せながら説明をしていくなかで自信を持ち、リーダー力やコミュニケーション力などが高まり、生徒自身が成長する結果となった。

さらに、12年間の指導計画を作成するにあたり、他校種の学習内容、特に実験・実習内容を私自身が理解でき、初めて知った内容もあった。日常的に「小学校、中学校で何を学んできたのか」という疑問を持ちながら、今まで学んできた内容を否定的に捉える傾向にあった。

本研究を通して、このような指導を改め、指導者がその生徒が今まで何を学習してきたかを知り、授業を進めることが重要であることを自分自身が気づき、改善することができた。

提言2 高齢者の生活と福祉について考える

授業の実践と評価の工夫と改善

北海道南茅部高等学校教諭 野田敬子

1 はじめに

本校のある函館市川汲町（旧南茅部町）は、渡島管内中部亀田半島東部に位置する。地域の特産品は昆布で、様々な商品開発がなされる等、漁業が盛んな町である。高齢化率は43.2%であり、函館市の33.7%と比較しても非常に高く、実際に祖父母と同居している生徒も多い。近所の高齢者（漁師さん）とともに昆布漁の作業をしている生徒もあり、高齢者の生活に触れる機会は市街地に住む高校生よりも多いといえる。

そうした家庭・地域の実態を踏まえ、高齢者の「気持ち」から地域の福祉サービスについて考えさせられないかと介護計画を立てる授業を実践した。3時間で行った授業のうち、中核をなす1時間について報告する。

2 実践内容

(1) 本時の目標

支援を必要としている高齢者がその人らしい生活を送る方法を考えることができる。

(2) 学習活動

プリントを使用し、函館市内在住の高齢者の3日間の介護計画を考える。

計画を立てる時は「残存機能の活用」「その人らしい生活の維持」「福祉サービスの利用限度額の確認」をポイントに考える。

(3) 評価方法

本時は「関心・意欲・態度」の観点で評価した。

(4) 成果・課題

高齢者（Aさん）がどんな人なのか、想像しやすくすることで生徒が高齢者（Aさん）やそ

の家族の気持ちを考えながら介護計画を立てることが概ねできた。また、基本的な知識として福祉サービスの内容を理解していることで様々な計画を考え、活発な話し合いにつなげることができていた。しかし、「高齢者（Aさん）やその家族の気持ち」と「福祉サービスの内容」の2点を理解した上でなければ、何をどのように選ぶのか考えることが難しい。想像力や理解力が必要でハードルが高いという生徒もいたが、具体的なサービス内容を確認できるような資料を提示したり、グループ内で教え合ったり、教師からの助言などでなんとか自分たちの考えを出すことができた。

今後はさらに高齢者のイメージをより持ちやすくするために、地域にいなそうな人（例えば昔漁師をしていたとか）をAさんとして設定するなど見直しを検討したい。また、近隣の介護施設職員の方やケアマネジャーなどにアドバイスをいただきながら、より実践的な内容にしていければと考えている。

3 おわりに

今回このような機会をいただき、学びを生活につなげることの大切さと難しさを改めて感じた。生徒・家庭・地域の実態を把握することでできる授業があり、配慮すべきことも変わってくる。また、つながりを実感することで、生徒の興味・関心を高めることができる。主体的・対話的で深い学びができる授業づくり等を目指し、今後も教材研究や評価方法の改善を進めていきたい。

提言3 教科間連携の実践

～蘭越町の特産品を使った商品開発について～

北海道蘭越高等学校教諭 松 下 万里音

1 はじめに

本校は、道南最大の河川「尻別川」の恩恵を受け、米など農作物栽培に力を入れている蘭越町で、「チャレンジ精神」に満ちた人間性を育む教育に力を入れている。

2年次から進学向けの「総合教養コース」か就職向けの「情報ビジネスコース」のいずれかを選択する。「総合教養コース」では、進学に向けて学習の幅を広げられるように数学Aなど様々な選択科目を選ぶことができる。「情報ビジネスコース」では、簿記といった授業を通して各種検定取得を目指し、社会で活躍できる人材になるべく学びを深めている。

また本校は、蘭越町から制服一式購入費用全額補助、学校給食提供といった多大な補助・支援を受けている。

2 実践内容・評価及び成果について

(1) 教科間連携の内容

総合教養コースの「フードデザイン」と情報ビジネスコースの「商品開発」で連携し、蘭越町の特産品を使った商品開発を行った。「商品開発」の授業では企画書（レシピの開発）を、「フードデザイン」ではその企画書（レシピ）を使って試作品を作るという役割分担を行い、商品の実現化を図った。試作品を作った際には町の企業の方々などを招待し、試食会も行った。

(2) 評価について

普段の調理実習と異なり、どのような仕上がりになるのかははっきりしないものを作るため、実技評価が非常に難しかった。そのため、評価の工夫としては、ただ上手にできたということではなく、それを作り上げるまでの課程と作ったあとの振り返りに特に着目して行った。

(3) 各年度の取組について

平成27年度では、「蘭越町の特産品を使ったお土産」をテーマに商品開発を行った。全5種類の品を生徒は考え、その中で蘭越産の米粉とトマトを使ったクラッカー風焼き菓子「トマラライسس」が後に町内のお菓子屋さんから商品化された。

平成28年度では、「蘭越産トマト、メロンを使ったお土産」をテーマに商品開発を行った。全4種類の商品を考えたが、メロンは加工が難しく、残念ながらこの年の企画からは商品化されるものは無かった。

平成29年度では、「お土産」から「その場で調理をして提供できる品」にテーマを変更。全3種類の品を開発し、蘭越産のじゃがいも、枝豆を使ったバンズによる「らぶちゃんバーガー」をチャレンジグルメに応募して本戦へと出場した。

3 おわりに

蘭越町や蘭越高校の活性化を目指して始めた教科間連携だったが、3年間行った結果、開発した品を使った販売実習まで行うことができた。自校名が付いた商品を扱うことで、生徒たちには、蘭越高校生として自信を持ってもらえたことが嬉しかった。商品開発については、反省点や改善点がまだまだあるが、これらも継続して取り組んでいきたいと考えている。今後も生徒の将来を考え、日々努力を惜しまず継続して尽力していきたい。



第 1 分 科 会 報 告

北海道留萌高等学校教諭 奈良岡 有 紀

■提言に関する補足・質疑応答

【補足】衣生活の 12 カ年指導計画の作成や中学校への乗り入れ授業について、年 3 回行われる天塩町教育研究協議会家庭部会だけでは足りなかった。教科ミーティングを 2 年間で 9 回実施、町教研も合わせて、計 15 回実施した。

【質問】中学生に調理実習の指導をして、困難だったことは何か。

【回答】実習後半、生徒が調理に集中しすぎて実習の説明が通らない場面があった。中学生とは関係性が築けていないため、強く指導できなかった。

■研究協議

1 グループ 7～8 人とし、3 つのグループで 2 つの協議の柱について研究協議を行った。協議の柱①ではウェビング (Webbing) 手法を用い、1 つのキーワードから思いつく言葉を書き出し、思考を広げていった。協議の柱②では Y チャートを活用し、情報の整理をしながら協議を行った。

【協議の柱①】『小・中・高等学校の連携について』

小・中学校のカリキュラムが思ったより詰まっているため、入ることができないという意見が出ていた。いきなり授業を連携するよりは、高校生がボランティアやオープンハイスクールを通して交流することや、小・中学校の公開授業参観などを通して、小・中学校の先生方とのつながりを作ることが大切であるとの意見があった。

【協議の柱②】『関心・意欲・態度の評価について』

「関心・意欲・態度」をひとつまとまりして評価している学校が最も多く、次に「関心・意欲」と「態度」を分けて評価している学校が多かった。

「関心」「意欲」では、ノート・プリントの確

認やレポートの内容など評価している学校が多く見られた。「態度」は実習で評価していると意見が多く見られた。観点別の考査を作っている先生もいるということで、考査に入っていると評価しやすいので、どのように作っているのかを知りたいという意見などが出された。

■助言者からのまとめ

○北海道札幌東高等学校 教諭 田中 晴美

地域によっては、色々な問題が絡み、小中高の連携は難しい学校もある。今回の研究発表は、小・中学校の先生にとっても受け入れ側として準備があり、お互い苦労があったと思うが、児童・生徒達の成長がわかり、小・中・高のどの先生にとってもプラスになるものであった。地域を結ぶ小・中・高の乗り入れ授業の素晴らしさを実感した。今後、さらに連携し乗り入れ授業の研究・研修を進め、ますます発展させていただきたい。

○北海道広尾高等学校 教頭 後藤 あゆみ

新学習指導要領では、社会に開かれた教育課程が必要となる。この教育課程を作るためには、地域の教育資源を活用することが有効である。中学校に家庭科の専科の先生がいない市町村もあり、地域に 1 つしかない高等学校の家庭科教員は、重要な教育資源の 1 つである。家庭科の内容は学校の中にとどまらず、地域の活性化や様々なヒントになっている。家庭科教諭の日頃の教育活動が係わることが多く、地域の活性化や働き方改革などの北海道の大きな流れを変える一翼に担っている。家庭科教員は、地域・北海道、そして日本を担う生徒を育てる家庭科教育に邁進していただきたい。

第 2 分 科 会 報 告

市立札幌新川高等学校教諭 柿 澤 小百合

■提言に対する質疑応答

【質問】指導計画では9時間で計画されており、本日の発表以外の時間の内容について聞きたい。

【回答】身体的特徴・変化などを座学で行い、趣味などに意欲的に取り組んでいる高齢者のDVDを視聴し、食事の介助体験や体験セットを利用した疑似体験を行っている。

【質問】高齢者の尊厳について、生徒の具体的な感想はどのようなものか。

【回答】高齢者に関して、マイナスのイメージは強い感じを受けるが、周りで精力的に働いている高齢者もいるので話題にあげている。

【質問】高齢者との同居など生徒の事前調査はしたのか。また、生徒の動かし方で具体的に何か工夫をしているのか。

【回答】事前調査は、挙手で確認する程度で、詳しいものは行っていない。グループ分けは話し合いが進むようなメンバーを入れる形にしている。

■研究協議

3つのグループに分かれ、2つの協議の柱についての意見交流とまとめの発表を行った。

【協議の柱1】高齢者の生活と福祉についての

各校の取り組みについて

(地域と連携した実践的・体験的な学習指導も含めて)

- ・車いすの体験のほか、プリンやとろみ剤を使用した食事介助を通して高齢者の気持ちを考えさせる、学校に高齢者の方を迎えて交流、地域の専門学校と連携した実習、高齢者サロンへの参加や新聞作成に関連して高齢者へのインタビューなどの実践を行っている。
- ・定時制や学級数の多い学校では地域との連携が難しい場合がある。
- ・住居分野でバリアフリーや住宅改修、被服分野

でGボタンなど、他の分野から高齢者への関連付けを行っている

- ・自分の人生の先を考えさせることが大切で、健康教育を行っていく必要がある。

【協議の柱2】家庭総合・家庭基礎における

主体的、対話的な深い学びについて

- ・生活経験の少ない生徒に想像させることは難しい。そのため体験が大事になってくる。
- ・人生100年表や人生すごろく作成、ホワイトボードと付箋を活用して全員の意見を反映させた実践などを行っている。
- ・グループワーク後の評価をどうするか。

■助言者からのまとめ

○北海道鷹栖高等学校 教諭 高井 央

福祉に関して取り組む3つのポイントについて

- ① その人らしい生活の維持…QOLや自立支援を踏まえて、他者との関わりを深め、生徒が自分の生活に生かそうとする活動を取り入れる。
- ② 気持ちや残存機能を活用…実技演習や授業・実体験を結び付けて、ノーマライゼーションの理解を深め、知の結晶化を目指す。
- ③ 地域とのかかわり…現在と将来を結び付けコミュニティへの参加意欲へ結びつける。

○北海道留辺蕊高等学校 教頭 佐野 陽子

生徒が主体的に取り組めるように計画・準備がなされ、地域の状況と問題を取り上げた、すばらしい実践だった。

学習指導要領と学校教育目標を充分に加味して教科の指導目標を立てることが大事である。また、新学習指導要領に向けて、改正の基本的考えを踏まえて、さらに生徒の生きる力の育成と深い学びを図るため、家庭科から発信してもらいたい。

第 3 分 科 会 報 告

北海道富良野緑峰高等学校教諭 佐 藤 有 紀

■提言者より補足説明

この取り組みは、複雑な家庭環境等で自己主張ができない生徒が多いことから、自信をつけさせたいと思い行った。「トマラライッス」は、イベント限定販売であり、受注生産（町内菓子店に委託）なので、通常は販売していない。

■提言者に対する質疑応答

【質問】フードデザインの選択者人数と生徒の実習費について。

【回答】10名前後。実習費は食物調理技術検定費を含め、5,100円。商品開発に関する材料費は、平成28年から学校で予算だてされているので実習費から支出していない。

【質問】フードデザインでつくったものを情報ビジネスコースの生徒が試食するのか。

【回答】商品開発の調理実習は、フードデザインの生徒だけでは、完成品のイメージ、金銭面の部分はわからないので、合同で行い、レシピを改善している。

【質問】「トマラライッス」の販売価格について

【回答】一袋200円。

■研究協議テーマ

①家庭・地域と連携した実践的・体験的な学習活動の指導について

②教科間連携の実践について

4つのグループにわけて情報交換を行った。

■研究協議のまとめ

①特産品を使用した商品開発についての活動が多く報告され、食に関わる連携が多いが、保育・高齢者施設での交流や地域行事へ参加などの報告もあった。いずれも地域との連携により、食だけではなく、福祉、保育等他の分野へとつながる可能性がある。地域とつながり、そのこと

を教えるのは大切である。また、校内での時間割調整や費用の工面、外部への発信方法、地域との連絡や相談等も重要である。

②他教科と学習内容が重ならないように調整はできても連携は難しい。教科担同士での連携は、理科、数学、英語等で報告された。個人対個人であると、教科担が変わると継続できないことから学校として取り組むことが必要である。

■助言者からのまとめ

○北海道厚真高等学校教諭 黒田さとみ

連携には、相談や行事に参加する等関わり、地域の力をうまく借りることが重要。生徒が主体的に活動することで自信になり、著しく成長する。実践には、様々な課題があると思うが、一歩踏み出してほしい。

この取り組みは、特産品から食育、高齢者、消費、加工面に活動が広がるので、授業、家庭クラブ等で新しい課題を自ら発見させるとよい。教科間連携については、教員間のおしゃべりを大切にし、教科間の共通理解のもと、どのような生徒を育てるのか考えることが大切。

○北海道江別高等学校教頭 左紺 摂子

各テーマの具体例等については新学習指導要領の共通・専門にも記載されているので確認するとよい。テーマは各校で取り組まれていることであり、「家庭科のキャリア教育プラン」で整理し、表にしてみるとよい。行っていることを記入し、課題を洗い出し、業務を見直し、各学校で育成を目指す生徒像に向けて整理する。これを各教科でも行うとよい。文部科学省の方は、生徒が主体であり、教師は演出家といっているので、生徒にとって有益な授業、教科の本質（楽しさ、おもしろさ等）を伝えていただきたい。

平成30年度第67回北海道高等学校 家庭科教育研究協議会講評

北海道教育庁胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班

指導主事 近 藤 麻理子

日頃から本道の家庭科教育の充実・発展のために御尽力いただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

はじめに、天塩高校の片桐由貴先生のご提言ですが、小・中・高等学校が連携し、小・中学校への乗り入れ授業に取組んだ実践でした。新学習指導要領においても、すべての教科において小・中・高等学校の系統性を重視しております。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、言語活動の充実が欠かせません。今後の課題としては、実習以外の分野で他教科とも連携し、小・中・高の系統性を重視しながら、教科横断的に取組むことも検討していただきたいと願います。特に消費者教育については、成人年齢が引き下げられることから、公民科と連携した取り組みが推奨されております。是非今後とも異校種間の連携について学校のウェブページ等で情報提供をいただきたいと思います。また、異校種の授業は非常に参考になる点が多いことから、授業公開などがある際にはぜひ積極的なご参加をいただき、ご自身の授業改善等に役立てていただきたいと願います。

次に、南茅部高校の野田敬子先生のご提言ですが、地域の実態を踏まえた非常に実践的な取組についてのご提言でした。2008年には全人口の約1/7だった高齢者が、2025年には1/5になることが予測されております。高齢化率の高い地域の実態を踏まえて、高齢者の「気持ち」から地域の福祉サービスを考えるという、日常に密接した取組でした。今後の課題としては、新学習指導要領においても高齢化の進展により高齢

者の尊厳と介護についての理解、生活支援に関する技能についてふれていることから、高校生同士が体験的に学習できるような取組を取り入れていただくよう願います。また、評価についても是非今後とも検討を進めていただきたいと思います。

最後に、蘭越高校の松下万里音先生のご提言ですが、他教科との連携を図った教科横断的に取組まれた内容でした。平成27年から、地域と連携しながら、町及び高校を活性化するべく、町の特産物を使った食品に関する研究を進められているとのことでした。商品化を目指す過程においては多くのご苦労があったことと思います。コープ札幌のチャレンジグルメコンテストへの参加など、積極的な取組をされており、専門科目における好事例だといえます。今後は、この授業を学校家庭クラブの取組として計画的に位置付けることを検討していただきたいと思います。

ご提言をされた各先生方に共通する事柄としては、学校の教育目標を踏まえて、育てたい生徒像という目標を明確に持って授業に臨んでいただきたいということです。教育活動を通じてどのような生徒を育てたいのかを今一度考えていただき、授業の改善・工夫をしていただければと思います。

最後に、細やかな心配りをして本研究協議会を成功に導いてくださいました関係各位に、改めて深くお礼を申し上げ、講評といたします。

グループ別体験研修報告

A 食育セミナー

1 主な内容

テーマ 「和食と香りの調和」

・デモンストレーション二品

(大暑の松花堂弁当にしのばせて)

を交えた講義及び昼食会

2 参加人数 18名

3 講師

光園学園調理製菓専門学校

日本料理講師 田安 透 様

4 会場 光園学園調理製菓専門学校

【研修内容・成果】

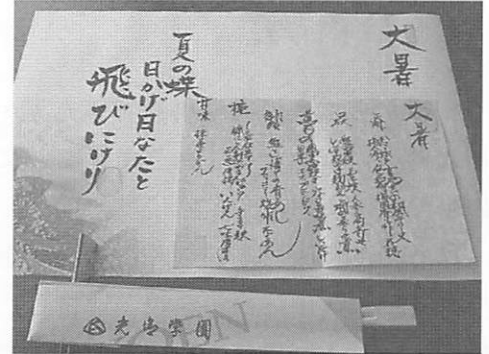
食育セミナーでは、講師・田安先生の和食に対する熱い思いと人生の歩みが見えるようなデモンストレーションに、参加者皆さんが心躍る時間を過ごしました。

一品目は、第6回日本料理コンペティション優勝作品「鮭としば漬けの香り飯 ～青柚子の香り～」は、香ばしく焼き上げた鮭・刻んだ柴漬けを米と共に羽釜に仕込み、炊きあげたもの。蓋を取った瞬間、あまりの美しい色と香ばしさに大歓声が！二品目の「蟹と帆立の和風テリーヌ ～夏野菜をしのばせて～」では、大暑の時期を考慮した食材で涼しさを演出し、赤・黄・緑とカラフルな中に梅肉をしのばせ、茗荷・穂紫蘇を添え香りのハーモニーを奏でた一品となりました。

「料理は五感で！」との師匠の言葉を胸に、料理修行に研鑽された豊富な経験を持つ田安先生。国際舞台での活躍のチャンスをお断りして、現職で若い世代に惜しみなくその技を伝授される姿勢に、生まれ育った北海道を愛する教育者としてのあり方をも学ばせて頂きました。

旬素材のチョイスから和食配膳の彩りを考え

た調理法、サプライズな香りの融合に食する側の心がいかに動かされるか、計算され、行き届いたおもてなしの神髄を垣間見る、豊かな時間となりました。



【講座担当者】

札幌手稲高等学校	東 昌江
札幌南陵高等学校	高橋 理緒
富良野緑峰高等学校	佐藤 有紀
函館西高等学校	對島 珠望
函館中部高等学校	石川佳寿美

(文責)

B 住生活セミナー

1 主な内容

① 講義：「住まいと防災の基礎知識」

② グループワーク：「DIG の実践」

2 参加人数 16名

3 講師

北海道立総合研究機構 建築研究本部

馬場 麻衣 様

4 会場 北海道立道民活動センター

「かでる2.7」540会議室

【研修内容・成果】

近年、大きな自然災害が続き、防災教育を取り入れた授業実践の必要性が高まっている。昨年に引き続き、北海道立総合研究機構の馬場麻衣先生を招き、住まいと防災の基礎知識について講義と演習をご教授いただいた。

前半、北海道の住まいの特徴、ライフステージと住まいについて、講義していただいた。

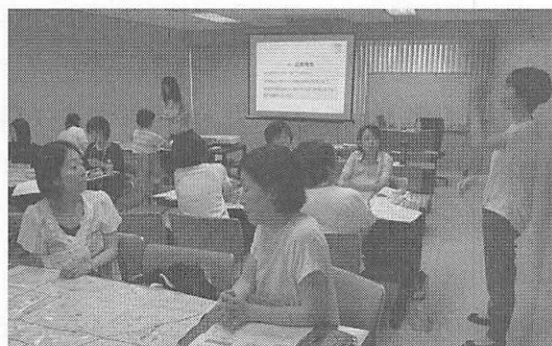
北海道の住まいの特徴としては、150年と歴史が浅く、入植したそれぞれの都道府県の特性をもった住宅が建てられたが、北海道の寒さに耐えられなかった。そのため、国の基準とは別に、北海道独自の住宅基準を作り、さらに北海道立総合研究機構（建築の研究所）が設立されている。このような研究所を都道府県単位で持っているのは北海道のみである。北海道の住宅は日本の他の地域に比べて格段に性能がいい。北海道の住宅は新しいものが多いのは、住宅性能の進化が進むので住み替えも早いのである。ライフステージと住まいについて、ライフステージによって住まいに対する住要求は異なる。今後の日本の人口は減少に伴い、世帯数も変化する。核家族が大幅に減少し、高齢者や未婚者の単独世帯が増えていくため、住要求も変化することが予想される。オーストラ

リアでは住まいは権利として法律で保障されているが、日本は住まいについては自己責任であるので、生涯を見通した適切な住まいの選択眼を養うことが大切である。

後半は、防災の基礎的知識の講義とグループワークでDIGを平行して行った。

グループワークでは、「DIG の実践」を行い、具体的な指導項目や注意点を確認することが出来た。DIG (Disaster Imagination Game) は大きな地図を囲み、災害時の避難や対策をイメージトレーニングする体験的学習手法である。DIGには、「災害を知る」「まちを知る」「人を知る」特徴がある。それを活用し授業に取り入れることで、地域の防災力が理解できる、防災ネットワークの形成を図ることができる、災害救援活動のイメージができる、地域への理解が深まる、といった効果がある。災害への強さ・弱さを知ることで、今後どのように対応していけば良いか、災害時には避難所の運営側に立つことができる高校生に学ばせることができるものである。

講義、グループワークともに実践的な内容で、授業改善につながる充実した研修となった。



【講座担当者】

札幌新川高等学校	柿 澤 小百合
札幌厚別高等学校	坂 口 真奈美
札幌工業高等学校	秋 田 貴 子
留 萌 高 等 学 校	奈良岡 有 紀
余 市 紅 志 学 校	千 葉 和 代
北見柏陽高等学校	竹 内 篤 子

C 家庭科技術検定（被服）セミナー

1 主な内容

① 講 義

「家庭科技術検定被服4級について」

② 体 験

「家庭科技術検定被服4級実技実習」

「評価研究」

2 参加人数 18名

3 講 師

北海道江別高等学校教諭

高 坂 瑠 美 様

紀 國 明 子 様

4 会 場

北海道江別高等学校

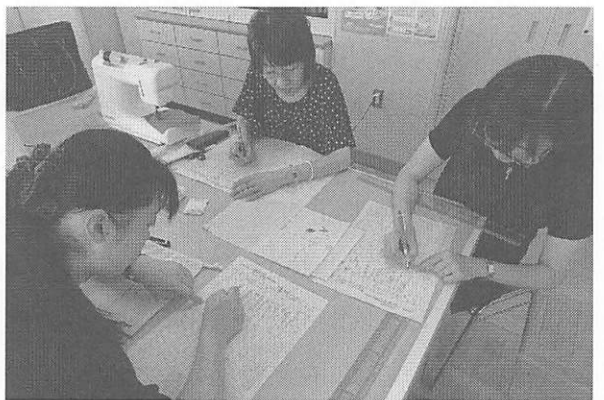
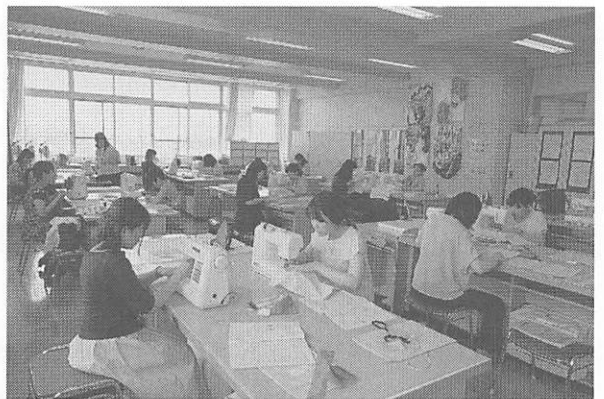
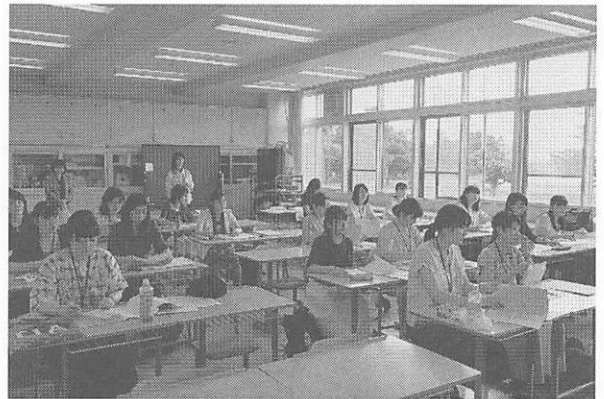
生活デザイン室・被服室

【研修内容・成果】

はじめに、家庭科技術検定実施状況について、どのように高校で家庭科技術検定を実施しているかの説明をしていただいた。続いて、家庭科技術検定被服4級の実技内容をDVDで視聴した。そして、被服室に移動し、4級の実技実習を行った。ミシン縫い、半返し縫い、まつり縫いやボタン付け等の基礎縫いを主に行った。今回私たちが製作した作品の評価は行わなかったが、実際はミリ単位での細かい部分まで評価が入ることを知り、慎重に取り組んだ。技術検定を行うにあたって、生徒の指導の仕方や注意点について解説をいただいた。

評価研究では、実際に生徒が作成した作品の評価を行った。私たちが行った評価と、実際に家庭科技術検定被服4級で行われた評価を比べ、評価の仕方や注意点を解説していただいた。

家庭科技術検定についてはもちろん、今後の授業等の教科指導にも大変役立つ研修だったので、今後の教科指導に活かしていきたい。



【講座担当者】

江 別 高 等 学 校

鈴 木 朋 美

高 坂 瑠 美

紀 國 明 子

D 消費生活セミナー

1 主な内容

- ① 講義：「成人年齢の引き下げによる関連法の改正について」「若者が巻き込まれやすい消費者トラブルについて」

② 消費生活センターの見学

2 参加人数 18名

3 講師

北海道立消費生活センター

事業部門 教育啓発グループ主幹

道高 真理 様

4 会場：北海道立消費生活センター

2階 小会議室

【研修内容・成果】

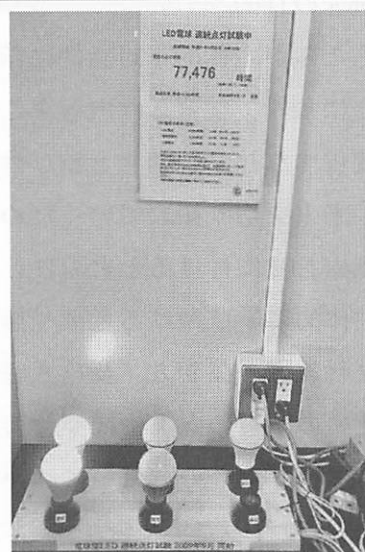
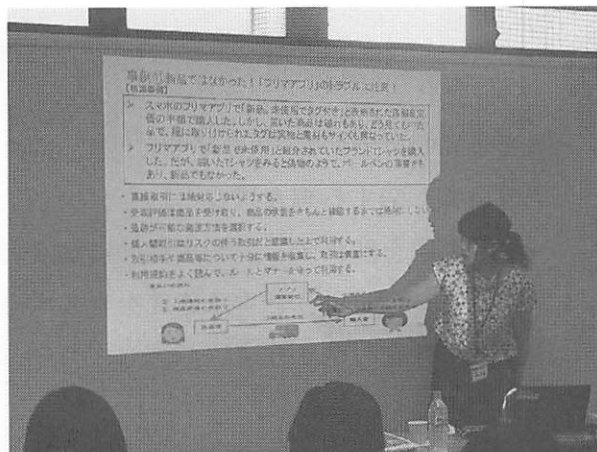
講義ではまず、成人年齢の引き下げにより契約の取り消しができなくなることで、そしてそのために、高校の先生方による消費者教育が一層重要になるであろうというお話を伺いました。

次に、若者の上位相談内容の資料を見て、気づいたことを話し合いました。男女ともに、デジタルコンテンツに関する相談が多く、一番でした。また、賃貸住宅の退去時のトラブルも上位に入っていました。20歳になると相談件数が急増しており、20歳は悪質業者に狙われているとのことでした。そして、民法の改正により、ターゲットが18歳になっていくことが予想されます。特にマルチ商法による被害が心配されるとのことで、18歳になる前に、契約のルールを学ばせることの必要性が、この資料からも読み取れました。

また、子どもたちはSNSの口コミをきっかけにトラブルに巻き込まれるケースが多いこと、オンラインゲームやフリマソフトのトラブル、受け子や名義貸しなど様々な事例を紹介していただきました。

講義のあとに、消費生活センター内の相談室

や商品テスト室の機器、展示ホールを見学させていただきました。



【講座担当者】

札幌 北高等学校	松 本 奈 巳
奈井江商業高等学校	高 橋 亜 紀
美唄尚栄高等学校	風 上 沙 織
豊 富 高等学校	佐々木 加奈子
清 水 高等学校	種 畑 幸 子

北海道高等学校長協会家庭部会 調査研究委員会報告

調 査 研 究 委 員 長

(北海道登別青嶺高等学校長) 井 上 明 子

1 調査研究のテーマ

学習指導に関する調査研究

～生活課題を解決する力や主体的に社会と
関わり参画しようとする態度を育成する
家庭科教育の在り方～

2 調査研究の目的

子どもたちが主体的・対話的に深く学んでいくことにより、学習した内容をこれからの人生や変化する社会の動きと結び付けて深く理解し、未来を切り拓いていくために必要な資質・能力を身に付けるとともに、生涯にわたって主体的に学び続ける意欲や態度を育成する家庭科教育の在り方、及び家庭科教員の資質・能力の一層の向上や授業改善の取組を活性化していくための方策等について研究を行い、家庭科教育の充実に資するものとする。

3 調査研究の経緯及び今後の方向性

学習指導要領改訂の趣旨等を踏まえれば、家庭科教育においては、生活の課題を発見し、課題解決に向けた実践活動を実施するとともに、それらの活動を評価・改善するなどの取組が求められており、こうした取組を効果的に進めていくためには、主体的・対話的で深い学びの実践を継続することにより、不断に授業改善を図ることが必要である。

本調査研究委員会においては、平成27年度から28年度までの2年間にわたり、問題解決能力及び意思決定能力を育成する指導の在り方等に焦点化して研究に取り組むとともに、学校家庭クラブ活動及びホームプロジェクト

の実践状況等の実態を把握・分析し、その調査結果を踏まえた問題解決型学習の基礎となる指導資料集を作成した。

今後においては、指導資料集の効果的な活用方法や、その内容の効率的な周知方法等について検討を進めるとともに、子どもたちが変化の激しい社会を生き抜くために必要な資質・能力を明確にし、現実の社会との関わりの中で豊かな学びを実現していくといった、社会に開かれた教育課程の実現に向けての諸課題を解決できるよう、教科横断的な取組や地域資源等を効果的に活用した取組などを通して、これからの問題解決型学習の在り方について調査研究を進めていくこととした。

4 調査研究の内容

- (1) 既に作成・配布した指導資料集の活用状況や主体的・対話的で深い学びの実施状況等に係るアンケート調査など調査研究
- (2) 主体的・対話的で深い学びの実践により授業改善に成果のあった単元の指導・評価計画、学習指導案等の指導資料集の提供
- (3) 「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」に係る単元の指導・評価計画、学習指導案等の継続的な提供

5 調査研究期間

平成29年4月～平成31年3月（2年間）

6 アンケート調査（H29年度実施）結果から課題として考えられること

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」を意識し

て取り組んでいる学校の割合は、約9割に上った。実習等の協働的取組やグループワークなど、校内においては積極的に実施されているが、保育所や高齢者施設等への訪問や地域連携など校外での体験的活動等については、連携の在り方等に困難さを感じているケースが少なくないことから、地域と連携・協働した活動の在り方について研修を深めていく必要がある。

- (2) 子どもたちに身に付けさせたい資質・能力を育成することができたか、また、授業のねらいを達成できたかを客観的に把握する評価の在り方について、どのように取り組んだらよいのか悩んでいるケースが少なくないことから、授業におけるPDCAサイクルの在り方等について研修を深めていく必要がある。
- (3) 授業において、生活に生かす力を身に付けさせたいとしているものの、実際の生活で生かすことのできる取組や課題解決に向けた効果的な取組の実施に難しさを感じているケースが少なくないことから、より効果的な実践を見聞したり授業交流を実施したりする必要がある。

7 課題解決へ向けた方策

- (1) 身に付けさせたい資質・能力を明確化し、教育課程全体の編成・改善に資するよう、教科横断的な取組や地域資源等を活用した取組に係る単元の指導・評価計画、学習指導案等を提供する。
- (2) 単元の指導・評価計画、学習指導案等の提供においては、指導と評価を一体化を踏まえ、授業改善及び授業づくりに取り組めるよう、多面的・多角的に評価できる評価シートも作成するなど、評価に係る実践的資料等を提供する。
- (3) 課題を発見し、それらを解決するために必要な資質・能力を育成する「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」に係る単元

の指導・評価計画、学習指導案等の提供を行う。

- (4) 現場の声も聞きながら指導資料等の効果的な活用方法等について工夫・改善を図る。

8 実践事例等の指導資料の提供及び活用

- (1) 教科横断的な取組や地域資源等を活用した取組

＜実践事例1＞「家庭基礎」において消費者庁作成の教材「社会への扉」を活用した家庭科と公民科の連携による教科横断的な実践例（小～中規模校向け）

＜実践事例2＞「フードデザイン」において地域資源（地域の特産物）を活用し、地域連携・食育推進活動を展開し、学校家庭クラブ活動に発展させた実践例（小規模校向け）

- (2) 前年度のアンケート結果を踏まえ地域連携などを通じた校外での体験活動等

＜実践事例3＞「家庭基礎」における年度を見通し計画的に取り組む保育施設訪問・交流から学校家庭クラブ活動に発展できる実践例

- (3) 指導資料の掲載方法

ア 「家庭科実践指導資料」の発行

イ 取組事例（単元の指導計画、本時案、ワークシート等）については、今年度3例とし次年度以降も継続的に紹介する。

- (4) 今後の活用方法

ア 道教委指導主事等や家庭科の教頭・家庭科教員と連携し、事例交流の取組を、道教委の教育課程研究協議会、8月の全道家庭科教育研究協議会、管内家庭科教育研究協議会や初任研、10年研などでも広げ、活用を図る。

イ 家庭科の教頭、家庭科教員を巻き込み、継続できる取組にする。

Ⅱ 平成30年度北海道高等学校 家庭クラブ連盟活動報告

平成30年度 北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動について

北海道家庭クラブ連盟成人会長

(北海道札幌丘珠高等学校長) 林 裕 司

日頃より本連盟の諸活動にご理解・ご協力をいただき心より感謝申し上げます。

平成30年度北海道高等学校家庭クラブ連盟の活動報告をさせていただきます。本会の目的は北海道の高等学校の家庭クラブ活動を促進し、学校家庭クラブ員の研究活動の意欲と資質向上を図ることです。各加盟校における家庭クラブ員の努力はもちろんのこと、各方面からのご支援やご尽力により、これまで数々の成果と実績を積み重ねてきており、今年度も精力的に取り組んでいただき、素晴らしい成果を残すことができました。

7月26日～27日に平成30年度第66回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会が東京都で開催され、「東京発 希望の切符を携えて夢に向かって走り出せ」をスローガンに全国から多くの高校生が参加し、全国の家庭クラブ員が交流を深め、レベルアップを図りました。

本道からホームプロジェクトの部では、札幌北高の清水菜緒さんが「YELL ～家族で切り拓け！健康への道～」というテーマで、学校家庭クラブ活動の部では、名寄産業高校が「さをりでつむぐ地域の絆 ～つながる心、笑顔とともに～」というテーマで発表し、それぞれ高い評価を得ました。

また、10月4日～5日には、平成30年度北海道高等学校家庭クラブ連盟研究大会・総会が、倶知安高校が当番校となり倶知安町で開催されました。ホームプロジェクトの部では、当別高校3年の木村奈津子さんが「体も心も健康に！忙しい家族のために！」というテーマで、

学校家庭クラブ活動の部では、札幌北高校が「Be happy with "Gohan" ～食環境の充実を目指して～」というテーマで発表し、それぞれ、最優秀者と最優秀校に輝きました。

来年度の全国・全道大会に向けて、全道各地でその準備が始まっていると伺っておりますが、家庭生活と地域社会の向上発展を目指し、さらに多くの新しい取り組みを期待しております。

さて、家庭クラブは全国的に加盟校の減少という課題を抱え、全国大会の総会で全国会費の値上げという結論に至りました。北海道も同じ課題を抱えていたため、10月の全道大会で開催された総会でも、全道会費の値上げが決定されました。これまでの活動を維持してゆく基盤はできましたが、今まで以上に家庭クラブの諸活動が充実・発展することを期待しております。

終わりになりますが、今年度は9月に北海道胆振東部地震が発生し、各地で甚大な被害を受けました。一日も早い復興をお祈りしておりますが、このような時にこそ、家庭クラブを会員相互の交流と友情を深める場として、活用してほしいと考えております。



第59回全国高等学校家庭クラブ連盟 指導者養成講座に参加して

北海道札幌南高等学校教諭 高橋 あき

顧問教諭の講義として「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動の指導の充実」と題し、文部科学省初等中等教育局教育課程科教科調査官市毛裕子氏より、新しい高等学校学習指導要領についての解説と今後の教科の取り組みについてご指導いただきました。学習していることの可視化や外部への発信の工夫を行い、家庭科という教科の学校内の存在感を高めていくことで、ホームプロジェクトや学校家庭クラブ活動の課題解決や発展につながっていくことを再認識することができました。

また、体験講座の「包む文化～風呂敷から知る日本の心～」では、講師として風呂敷文化研究家つつみ純子氏を招き、風呂敷の歴史から日本の伝統文化についての講話とともに、風呂敷を使用した基本の真結び、箱包み、瓶包み、風呂敷バックなどの体験研修を行いました。風呂敷という一つの教材から、歴史、生活の変化、文化、日本人としての感性を幅広く学習することができ、学習教材を多面的な視点から取り扱うことで、より深い学びへとつながることを体感しました。

さらに、「より充実した学校家庭クラブ活動を目指して」をテーマとして、実践報告交流を行いました。学校規模や専任教諭数、学科設置校など、学校事情が似通ったグループ構成を行ったことで、各校の課題を共有し、どのように解

決していったら良いかを積極的に話し合う時間となりました。専任が一人でも無理なく取り組める学校家庭クラブ活動の方策としては、校内環境を自ら整えていく必要性についての意見が多く上がりました。校外とのネットワークを広げ、生徒の対外的な活動へと発展させていく際には、校内での理解・評価・応援が活動の強い後押しとなります。日常的に他教科の教諭とのコミュニケーションを図り、教科外の学校業務を丁寧に行っていくことが、教員間連携の基軸となり、教科指導の広がりにつながっていくことを改めて実感しました。

今回、初めて参加させていただきましたが、熱意と信念を持って家庭クラブ活動に取り組む全国の先生方との交流とともに、様々な活動について実践方法や課題を具体的に学ぶことができ、大変有意義な2日間となりました。このような貴重な機会を与えていただいたことに深く感謝するとともに、この研修での学びを今後の家庭クラブ活動に生かしていきたいと思います。



第66回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会 北海道代表出場校として ホームプロジェクトの部

北海道札幌北高等学校教諭 松本 奈巳

平成30年7月26日（木）、27日（金）に東京都文京シビックホールで標記大会が開催され、発表者の清水菜緒さんを含めた6名と参加いたしました。猛暑の中でしたが、環境の変化に戸惑うことなく落ち着いて発表に臨むことができました。また、他の学校の発表や展示を見ることで、課題設定の着眼点や実践内容における創意工夫、発表のまとめ方や姿勢など、教員・生徒ともに大きな刺激を受け、自分たちの取り組みを振り返るよい機会になりました。

本研究は、テーマを「YELL～家族で切り拓け！健康への道～」に設定し、父の健康改善について取り組みましたが、両親は共働きで多忙であること、本人も岩見沢から通学しているため、限られた生活時間の中で効果的に取り組むことができるか、という不安がありました。そこで、『時間がなくても普段の生活で今後も継続できる』『多忙な家族が協力し合える』『準備も簡単』な取り組みについて、アイデアを出し合い、プロジェクトをスタートさせました。

食べたい物を好きなだけ食べ、運動もせず、健康にも全く気を配らない父親の行動を変えていくのは予想以上に大変だったようです。しかし、父親の取り組みをスモールステップで設定し、成果を見やすくすることでやる気を促せたことや、母親が細かな軌道修正のアドバイスをしてくれたこと、運動する父親に妹がつきあってくれるようになったという家族の絆も、ホームプロジェクトを前進させました。何より現在も、父親が自らの健康改善に向けて自発的に、自分が楽しめる形

で継続していることが、彼女の自信となり、今後の人生においてもこのメソッドを活用し、よりよい生活を送る力になっていくだろうと思います。

学習指導要領改訂により、次年度入学生から「総合的な探究の時間」が教育課程に位置づけられ、今後は、各教科においても学習のプロセスに習得・活用・探究を取り入れていくことが求められます。家庭科では、家庭やそれに付随する世の中の様々な現象・問題を我がこととして捉える力、解決に向けて取り組む実践力、その評価・改善から新たな課題解決に向かう過程を繰り返し、生活の向上を目指すホームプロジェクトに從來から取り組んでいます。この意義を再確認し、ホームプロジェクトに取り組む生徒への意識付けとその価値を高めていけるよう、指導にあたりたいと思うようになりました。

最後になりますが、全国大会出場にあたりご協力いただいた関係機関や皆様に心から感謝申し上げます、報告といたします。



第66回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会

北海道代表出場校として 学校家庭クラブ活動の部

北海道名寄産業高等学校教諭 内 田 恵 子

平成30年7月26日～27日、東京都文京シビックホールで開催された第66回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会に生徒4名を引率し、「学校家庭クラブ活動の部」において「さをりでつむぐ地域の絆～つながる心、笑顔とともに～」という題目で発表を行いました。

本校のこの取り組みは、「さをり織り」と呼ばれる織物をテーマに、ものづくりや交流活動を通して、地域との絆を深めるという研究内容です。さをり織りは、織り手の自由な感性で織られる織物で、その特徴から障がい者施設や高齢者施設でも広く取り入れられ、個性を生かした作品作りに活かされています。また、名寄市の障がい者支援施設でも取り入れている現状を知り、今回はそのさをり織りを研究のテーマとし、本校家庭クラブの特色でもあるものづくりでの地域交流を通して、地域に貢献できる活動内容を目指し取り組みを開始しました。

活動では、実際の機織り体験でさをり織りの理解を深めることから始め、地域の方には継続したアンケート調査を行いました。リハビリの専門家やカラーコーディネーターの先生にもアドバイスをいただき、そこから、さをり織りの持つ「医療・福祉」の視点や、「色の持つ効果」などを意識した活動へと結びました。そして、リハビリの視点を取り入れた壁掛けカレンダーの制作や色彩を活かした小物作りを行い、実際にものづくり教室や販売活動なども実施しました。更に、名寄市の超高齢社会という現状を踏まえ、高齢者の方へ向けた「さをり織りの反射ストラップ制作」も行い、実際に交通安全運動で配布しました。

1年目の活動を踏まえて、2年目となる今年度は、更に改善を加えながら研究内容を深めていきました。継続した活動を通して、広く地域と繋がる活動をすることができ、地域の新しい魅力を知りきつかけにもなりました。

全国大会では、オープニングの和太鼓やアトラクションのチアリーディング、生徒交流の東京五輪音頭などをはじめ、他県のクラブ員の素晴らしい発表を聞き、生徒も大変よい刺激を受けていました。発表本番では生徒も練習の成果を十分に発揮でき、結果として、『東京都教育委員会賞』を受賞することができました。講評では、家庭科の専門学科ならではの取り組みや地域交流を取り入れた活動を評価していただくことができました。

全国大会に参加し、全国のクラブ員や先生方との交流、多様なテーマの研究発表を聞き、指導方法などにおいても大変勉強させていただきました。これまで、家庭クラブ活動に協力していただいた皆様に深く感謝するとともに、今後も生徒と共に地域の活力となる活動ができるよう取り組んでいきたいと思っています。



第67回北海道高等学校家庭クラブ連盟 研究大会・総会を終えて

北海道倶知安高等学校教諭 渋井 美和子

平成30年10月4日（木）、5日（金）の2日間、倶知安町文化福祉センターを会場に、加盟校15校のうち11校が出席、顧問・生徒合計79名のみなさまに参加いただき、標記大会が行われました。

今年度は各支部から学校家庭クラブ活動の部で5校、ホームプロジェクトの部で3校の研究発表と、指導者養成講座へ参加した札幌南高校による報告、札幌丘珠高校、札幌南高校クラブ員が司会進行を行った生徒代議員会、生徒研修では紙刺繍製作を行いました。

初めて大会に参加したクラブ員も多かったようですが、「2日間の大会を通して、他校の研究発表すべてが勉強になることばかりで、今後に活かせる内容でとても充実していた。」

「普段他校の生徒と交流することが少ないので、日頃の活動の情報交換もでき、今後の活動のモチベーションにもなった。」という感想をはじめ、何らかの学びがあったようです。

さて、研究発表では学校家庭クラブ活動の部では北海道札幌北高等学校家庭クラブの「Be happy with “Gohan” ～食環境の充実を目指して～」、ホームプロジェクトの部では北海道当別高等学校 木村 奈津子さんの「体も心も健康に！忙しい家族のために！」が最優秀賞に選ばれました。

今年度、運営を担当しましたが至らない点も多く、参加校顧問の先生方、クラブ員のみなさまにはご迷惑をおかけしました。率先して担当業務を担い、担当以外の業務にも積極的に手を貸してくださったお陰で無事終えることができました。心より感謝申し上げます。

結果報告

【学校家庭クラブ活動の部】

最優秀賞	札幌北高校 家庭クラブ Be happy with “Gohan” ～食環境の充実を目指して～
優秀賞	厚真高校 家庭クラブ ハスカップでつながる、広がる、 幸せいきいき生活！
アイデア賞	旭川永嶺高校 家庭クラブ 次世代に残したい食文化 ～「おにぎり」プロジェクト～
普及賞	名寄産業高校 家庭クラブ さをりで地域をつなぐプロジェクト ～ものづくりから地域を笑顔に！！～
協力賞	倶知安高校 家庭クラブ KUKKOU CULTURAL EXCHANGE ～コミュニケーションを通してつながる文化～

【ホームプロジェクトの部】

最優秀賞	当別高校 3年 木村 奈津子 体も心も健康に！忙しい家族のために！
優秀賞	江別高校 2年 中島 こゆき 家計にやさしい野菜
アイデア賞	札幌丘珠高校 2年 鶴飼 可緒瑠 ドサンコ調理！～道産小麦をそえて～



Ⅲ 平成30年度北海道家庭科 技術検定委員会活動報告

家庭科技術検定の実施について

北海道高等学校家庭科技術検定委員長

(北海道江別高等学校長) 吉 田 岳 夫

日ごろから、専門委員の先生方のご尽力や各校のご理解とご協力に、心より感謝を申し上げます。

さて、平成32年度から被服製作、食物調理、保育の一元化が全国で実施されますが、本道では昨年度から試行的にスタートしました。

今年度の全道の受検者数につきましては、それぞれ別表のとおりです。被服製作・食物調理検定につきましては、昨年度に比べ180名もの減少、平成26年度に比べ543名の大幅な減少となりました。一方、保育技術検定につきましては、11校より合計1,080名が受検しました。

検定への取り組みは、求められる学力向上への一つの重要な推進力と確信しております。今後とも、本技術検定の益々の充実と発展に向け、皆様方の尚一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

1 事業報告

(1) 専門委員

役 職	学校名	氏 名
全国・北海道(和服)	函館大妻	西 本 千 春
全国・北海道(洋服)	江 別	高 坂 瑠 美
全国・北海道(食物)	名 寄 産 業	中 森 真 也
全国・北海道(保育)	函館大妻	工 藤 真 知 子
全国・北海道(保育)	当 別	澤 谷 郁 恵
北 海 道(被服)	江 別	紀 國 明 子
北 海 道(食物)	千 歳 北 陽	古 御 堂 敦 子
北 海 道(食物)	三 笠	斎 田 雄 司
北 海 道(保育)	当 別	今 多 靖 子

(2) 諸会議・講座等

①常任委員研究協議会 H30.4.19

②第1回専門委員研究協議会 H30.4.19

③平成30年度家庭科技術検定評価研究協議会検定委員養成講座 H30.8.1

④第2回専門委員研究協議会 H30.8.30

2 被服製作・食物調理検定受検者数の推移

	種 目	H30	H29	H28	H27	H26
4級	被服	197	365	158	250	315
	食物	1,037	957	1,132	1,157	1,106
3級	被服	146	146	126	128	154
	食物	574	576	673	749	786
2級	和服	60	37	58	58	76
	洋服	56	32	57	54	50
	食物	217	265	249	296	305
1級	和服	40	62	56	50	51
	洋服	26	49	44	42	45
	食物	165	209	205	224	173
合 計		2,518	2,698	2,758	3,008	3,061

3 保育検定受検者数(11校 合計1,080名)

音楽・リズム表現技術				造形表現技術			
4級	3級	2級	1級	4級	3級	2級	1級
113	29	19	24	213	76	24	20
言語表現技術				家庭看護技術			
4級	3級	2級	1級	4級	3級	2級	1級
239	63	22	27	120	46	21	24

全国高等学校家庭科保育技術検定

全国専門委員会に参加して

全国専門委員会（保育）

北海道当別高等学校教諭 澤谷郁恵

平成30年5月10日（木）、11日（金）の2日間にわたり、標記専門委員会が東京都のアルカディア市ヶ谷を会場に開催されました。

この専門委員会は、検定実施にあたり、各都道府県で検定における評価基準の統一を図るとともに、運営上の諸問題を協議し、技術検定の趣旨徹底並びに推進を図ることを目的としています。家庭科技術検定の一元化により、昨年度の専門委員会は食物調理、被服製作と合わせて開催されましたが、今年度は食物・被服が3年に一度開催される全国大会のため、保育単独の専門委員会となりました。北海道からは、本部委員として運営に携わる当別高校の今多靖子教諭、専門委員である函館大妻高校の工藤真知子教諭と私の計3名が参加しました。

1 全体会

文部科学省初等中等教育局 市毛祐子教科調査官よりご祝辞があり、新学習指導要領は主体的・対話的で深い学びを実現させるため、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で構成されており、この観点からも保育検定の意義が大きいとお話がありました。

2 評価講習会

(1) 家庭看護

4～1級の順に、評価の観点や得点の解説、具体的な事例を挙げての生徒への指導の仕方など詳細な説明がありました。評価基準・実施上の注意を確認して、保育人形等必要な用具を必ず用意

するようにと補足がありました。

(2) 音楽リズム

各級についての説明があり、歌唱については歌詞をイメージすることが大切であること、ピアノ演奏については指の形など基本が身に付くようにし、楽譜をよく見て、曲想を理解して練習することが大切でることがわかりました。

(3) 言語表現

各級の解説、得点について詳細な説明があり、絵本の扱い方については折癖をつけることの重要性、持ち方とめくり方の注意点について丁寧な説明がありました。

(4) 造形表現

各級について、複数の生徒の作品画像を用いた得点の解説がありました。解説に用いられた生徒の作品が展示されており、実際に見て、得点の基準を理解することができました。

(5) 指導助言

顧問の高賀敦子様からは、各都道府県での伝達講習の必要性、委員長の宣真高等学校 中川千津江校長からは「保育技術検定1級を取得した生徒は現場力があると高い評価を受けた。自信を持って指導してほしい」とご助言いただきました。

3 おわりに

評価の目を揃えるよい機会をいただいたことに感謝し、北海道における講習等で還元していきたいと思います。また、検定を通して、生徒ひとり一人が知識や技術を身に付けるために努力し、結果に繋がる経験によって大きく成長できるよう指導の工夫をしていきたいと思いました。

全国高等学校家庭科被服製作技術検定・ 食物調理技術検定研究大会に参加して

全 国 専 門 委 員 (食 物)

北海道名寄産業高等学校教諭 中 森 真 也

平成30年8月2日(木)、3日(金)の2日間、ホテルナゴヤキャッスルを会場に全国高等学校家庭科被服製作・食物調理技術検定研究大会が行われました。北海道からは函館大妻高校の西本千春教諭、江別高校の高坂瑠美教諭とともに参加をしました。

1 全体講演

全体会の中の講演会では、「アスリートと食生活」と題して、北京オリンピックソフトボール金メダリストの伊藤幸子様、馬淵智子様を講師とし、競技生活における食生活の重要性と食における知識・実践力の大切さについて講演がなされ、大変興味深い内容でした。

2 分科会

被服製作分科会、食物調理分科会に分かれて研究協議が行われました。食物調理分科会では、指導要項、実技試験、評価基準について具体例をあげて、詳しい解説がありました。

また、今年度からの変更点についても細かく確認・解説がなされました。続いて平成31年度から変更となる各級の指定調理や献立作成における変更点、評価基準における変更点についても解説がされました。具体的には評価は減点法から加点法への変更、質疑応答集の大幅な改訂点、材料および利用方法などについての確認がありました。

愛知県版モデル献立では2級、1級献立についてのスライド紹介と解説があり、その後、実際に調理されたものを見て、評価講習を行

うという大変貴重な経験ができました。

また、助言者の先生のお話の中で、技術検定に限らず家庭科教育における「実技試験の目的」を明確にし、成長を評価できる実技試験を行っていくべきとのお話がありました。

3 全体会

「新しい学習指導要領と家庭科技術検定」として、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官である市毛祐子様より全体講話がありました。

高等学校における新学習指導要領の実施に向けて進む中、知識と技術の定着を図る授業づくりを行う上で、実習の見直しや工夫、ICTの効果的な活用等と同様に、技術検定の活用も行っていく、また、家庭科技術検定の推進に向けて教師の技術力の向上(客観性)、生徒への効果的な指導(情熱)、外部への広報(見える化)という3つの柱を立てて進めていくことが大切であるというお話がありました。

本部連絡として、次年度からの受験料改定と教材費の変更等について、次回の全国専門委員会についての連絡がありました。

4 おわりに

3年に1度開催される全国大会に参加させていただき、大変貴重な経験をすることができました。全国から集まった先生方から刺激を受け、今後も家庭科技術検定の普及・充実に貢献していけるように、生徒とともに励んでいきたいと思ひます。

全国高等学校家庭科被服製作技術検定・ 食物調理技術検定研究大会〈愛知大会〉に参加して

全国専門委員（被服）
北海道江別高等学校教諭 高坂 瑠 美

平成30年8月2日（木）、3日（金）の2日にわたり、標記研究大会が愛知県名古屋市で開催されました。40℃を超える外気とは別世界の、ホテルナゴヤキャッスルからは素晴らしい名古屋城が見えました。

この研究大会は、検定実施にあたり、各都道府県で検定における評価基準の統一を図るとともに、運営上の諸問題を協議し、技術検定の趣旨徹底並びに推進を図ることを目的としています。今年は3年に一度開催される全国大会で、全国から理事校代表者、指導主事、専門委員の先生方など総勢310名が一堂に会しました。北海道からは理事校代表である江別高校吉田岳夫校長先生、食物専門委員である中森真也先生（名寄産業高校）、被服専門委員である西本千春先生（函館大妻高校）と高坂（江別高校）の4名が出席しました。

1 分科会

被服製作、食物調理ごとに分科会が行われ、それぞれ29年度報告がありました。受検申込人数は年々減少し、技術検定実施の意義を考えたとき、生徒に身に付けさせたい力を達成させるためにも、検定を実施しやすい環境作りなどの工夫が不可欠であることを痛感しました。

また、作品評価ではグループごとに4級から1級までの6作品を細かく評価し、その討議を通して、評価のポイントについて共通理解を深めました。『被服製作資料』について、改良された点などが詳しく説明されました。この『被服製作資料』は検定を実施する上でわかりやすくまとめられ、指導資料としても活用できるものなので、今回購

入できなかった各校の先生方には、必要に応じて理事校から紹介できるよう準備していきたいと考えております。

2 全体会

2日目に行われた全体会では、各分科会からの報告の後、文部科学省初等中等教育局 市毛祐子教科調査官による講話があり、学習指導要領改訂の考え方、改訂のポイントについて説明がありました。そして、家庭科の存在感を高めていくためには教員が心をつなげて連携し、研究会等の組織力を高めるとともに、学校内での存在感も高めていくことが重要で、その取り組みとして、授業作品等の展示、学校家庭クラブ活動やコンテストの結果等、学習成果の可視化が必要であるということでした。

また、技術検定推進のためには「教師の技術力の向上」、「生徒への効果的な指導」、「外部への広報」の3点が必要であるという話もありました。

3 おわりに

全国と同様、北海道でも技術検定の申込人数は年々減少しています。しかし、検定を実施することによって、生徒ひとり一人が目標に向かって努力し、その結果、得られた喜びや達成感、充実感はいかたがえのないものです。そのような機会を与えてくれる技術検定は、家庭科教育の中でも貴重なものであることを改めて実感しました。

今後とも検定理事校として、検定実施の推進と普及に取り組んでいきたいと考えております。

IV 家庭科教育に関する報告

第56回北海道高等学校教育研究大会 教科別集会家庭部会を終えて

市立札幌清田高等学校教諭 清野祥子

平成31年1月10日(木)、札幌エルプラザ4階大研修室において道内各地から69名の参加を得て、研究主題「生涯を見通して生活を創造する力を育む家庭科教育」のもとに開催した。

1 総会

平成29年度事業報告・決算報告・会計監査報告、平成30年度事業計画・予算案が承認された。平成31年度研究主題については、役員会・運営委員会に一任された。

2 講演

演題：「LGBTを通して考える

多様性ある社会の実現に向けて」

講師：前札幌市男女共同参画課長

廣川 衣恵 様

LGBTは人口の約8%であり、理解者が少なく負のスパイラルを生んでいる。札幌市では政令市では初めて平成29年にパートナーシップ宣言した。当初反対意見も多かったが、緊急に必要としている人のために踏み切った。学校でLGBT対応をする事は、社会とのつながりを知り、未来に向けて考える人生の通過点として重要である。学校を安心・安全の場にするための環境づくりが大切である。受け入れなくても受け止めてほしい。アイデンティティを受け止める事が大切である。

3 研究協議

(1) 研究発表

主題：「必修修科目における

調理実習の充実をめざして」

発表：北海道旭川商業高等学校教諭

小松 裕美

食育の観点や生徒の実態から「協力・協働」

体験授業という面からも調理実習の重要性や意義は高いと考え、効果的な実習の充実を目指している。様式や調理法、食品が重ならないよう配慮し、メニューを3品から簡単な4品にすることで生徒に自信を持たせ、意欲の喚起に繋げている。グループ編成に配慮し、その中での役割分担やルールの明確化をすることで生徒の意識の改善、作業効率の向上に努めている。

(2) 情報交換

実践内容や、工夫されている点、疑問点などを協議、情報交換が活発に行われた。

(3) 助言：北海道教育庁胆振教育局教育支援課 高等学校教育指導班指導主事

近藤 麻理子 様

生徒が頭と身体をフル回転させたいという目標の下、「主体的・対話的で深い学び」という新学習指導要領に対応し、基礎実習や教科内での横断的学習など豊かな学び合いのために工夫されていた。期待する生徒像や、評価の基準を明確にし、達成感に繋がるようにという助言をいただいた。

4 研究紀要

「家庭科で取り組むESDと

キャリア教育の実践について」

執筆：北海道留辺蘂高等学校教諭

向山 千尋

平成25年度にユネスコスクールに加盟し、授業を中心にESD(持続可能な開発のための教育)の実践を行ってきた。キャリア教育とESDの視点を生かした家庭科の授業づくりから教育効果や課題、展望について執筆していただいた。

北海道高等学校長協会家庭部会 意見・体験発表大会を開催して

事務局 北海道江別高等学校教諭 上 野 博 美

1 大会を運営して

今年度で6回目を迎えた家庭部会意見・体験発表大会は、『全道の高等学校で家庭・福祉を学んでいる生徒が、日頃の学習で学んだことの成果について、意見や体験を発表するとともに、生徒相互の交流をとおして、「生きる力」を育み、家庭・福祉教育の充実を図る』ことを目的に実施しています。

8月24日、北海道江別高等学校を会場に、昨年度より微増の10校10名の発表がありました。普通教科「家庭」での学びの他、選択科目や家庭クラブ、専門学科ならではの体験など、多様化した社会の中で、豊かな心をもって生き生きと活動している姿を見ることができました。今後も、主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる家庭・福祉教育の「生きる力」を感じる大会にしたいと思います。

昨年度の反省を受け、大会開催周知のため、地区の協議会で案内配付を行いました。さらに多くの高校が参加しやすい大会にしていきたいと思います。新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにもこの大会をぜひ、ご活用ください。特に、普通科の生徒は日ごろの活動を外部で発表する機会が少ないので、この大会が役立つものと考えています。

来年度もこの趣旨を踏まえ、多くの生徒が参加できるよう、ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。そして、この大会の宣伝をしていただきたく思います。参加いただいた各高校の生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

2 大会参加者

- ①名寄産業高校 佐藤 麗 『夢への階段』
- ②千歳北陽高校 花見 拓哉 『THIS IS ME!』
- ③置戸高校 小泉 志帆 『笑顔のチカラ』
- ④剣淵高校 三木 さくら
『尊敬する人の言葉』
- ⑤当別高校 夏坂 勇人
『僕を成長させてくれた
当別高校家政科食物調理コースの行事』
- ⑥ニセコ高校 中鉢 蒼
『守り、繋ぐ～Niseko Styleのおもてなし』
- ⑦札幌手稲高校 依田 美佳
『ありのままの自分と向き合うって大切』
- ⑧江陵高校 山川 龍志 『笑顔の力』
- ⑨江別高校 小林 一菜
『だから私は選んだ』
- ⑩三笠高校 村木 宏寧
『これまでのわたし これからのわたし』

3 大会結果

- | | | |
|------------|--------|-------|
| 最優秀賞(産振推薦) | 三笠高校 | 村木 宏寧 |
| 優秀賞 | ニセコ高校 | 中鉢 蒼 |
| 優秀賞 | 札幌手稲高校 | 依田 美佳 |
| 産振推薦 | 江陵高校 | 山川 龍志 |

※産振推薦:家庭部会代表として平成30年度産業教育意見・体験発表大会に参加しました。



北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に 参加して（家庭科に関する学科代表）

発表者 北海道三笠高等学校3年 村 木 宏 寧
指導者 北海道三笠高等学校教諭 浦 川 智 帆

1 生徒を指導して

自身の成長を見つめ直すことで、将来の新たな目標に繋げることができ、生徒の様々な活動を支援することの大切さを学びました。

2 生徒原稿「今までの私とこれからの私」

小さい頃からお菓子・料理を作ることが好きでした。私の夢は、料理もお菓子も作れるオーナーシェフになることでした。中学生になり、私は「貝印スイーツ甲子園」という大会の番組を観ました。高校生が三人一組でオリジナルスイーツを作り、アイデアと腕を競う大会です。作り手のたくさんの努力、そして様々な感情も一緒に渦巻いていることを知り、スイーツ作りの奥深さを感じました。私もこの舞台に立ちたいと思いました。

私は、その大会で全国優勝を果たした三笠高校を受験、合格し、憧れの製菓部に入部しました。親元を離れての寮生活、実習、不安はあったものの、それ以上に同じ夢を持った仲間との生活がとても楽しく、充実していました。

2年生の春、スイーツ甲子園に出たいという強い気持ちを持って練習を重ね、書類審査を突破。東日本ブロック予選大会進出を果たしました。大会までの期間、チームの仲間と練習を重ね、時には衝突することもありましたが、改めて仲間を信じることの大切さに気づかされました。そして挑んだ初めての大舞台。結果は予選敗退。しかし諦めることなく、審査員の方から頂いたアドバイスを生かし、来年もこの舞台に立つという大きな目標を掲げました。

それからの一年間、催事等への出店、大会、

商品開発、三笠高校生レストランエソール。製菓部部長としての活動は想像を遙かに超える忙しさでした。日々、高校生レストランオープンへの準備に追われる中で、またスイーツ甲子園の季節がやってきました。今年は三笠高校から私のチームを含め二つのチームが書類審査を突破しました。一年ぶりのリベンジをかけた二度目の大舞台。しかし、本番でまたも予選敗退。今年は昨年の審査員と変わり、また逆の指摘を受けました。誰からも愛されるケーキを作るとは本当に難しいと思った瞬間でした。自信があっただけに、現実を受け止められず涙が止まりませんでした。支え、協力してくれた家族や仲間、先生に対し、申し訳ないという気持ち。そして共に頑張ってきたもう一チームが決勝大会に出場するという嬉しさと悔しさが混ざる複雑な気持ち。様々な思いを抱えたまま私の高校生生活最後の夏は幕を閉じました。

スイーツ甲子園のために三笠高校に入学しただけに今回の結果に対するショックは大きいものでした。しかし、三年間の様々な経験を通じて新たな夢を見つけました。「食」で人を幸せにする。それは現場に立つ者だけが為し得る事と思っていましたが、これまでの経験から他にも方法があること知ったからです。

まだ知らない、食について深い知識を身に付けるため、大学進学という新たな道に一步を踏み出します。「食」の道で多くの人へ恩返しをし、社会に貢献できる人材になりたい。そして、今までの私は、これからの私に繋げるための、大切な存在であったと証明して見せます。

北海道高等学校産業教育意見・体験発表大会に 参加して（福祉科に関する学科代表）

発表者 江陵高等学校 山 川 龍 志
指導者 江陵高等学校 田 中 孝 賢

1 生徒を指導して

生徒自身、今までこのように人前で発表するという経験がなく非常に緊張をしていたが、結果として「優秀賞」をいただくこととなり、生徒の中で大きな自信につながったと思われる。

2 生徒原稿『笑顔の力』

「実習、めんどくさいなあ」1年生の私は実習に向かう毎朝、玄関でぼそっと出る一言だった。実習に積極性は欠かせないものだ。しかし、「行きたくない、面倒くさい」この思いが積極的なところを奪っていった。

この実習に対する嫌な思いがガラッと変わるタイミングがやってきた。2年生の夏だった。35℃の炎天下、夏の実習がスタートした。今回はデイサービスだ。毎日来る人が違うため毎日が新鮮な感覚、そんな日々だった。

デイサービスでの実習は「レクリエーション」が目的だった。来た方々は、「今日も楽しかった」と笑顔でバスに乗っている。そんな光景を目にした。その様子を見て、私は「自分にもできるのかな」そんな不安に駆られた。実習担当の方に思い切って聞いてみた。「すみません。レクリエーションって、どんな感じで進めていけば、楽しんでもらえますか？」正直、イメージがつかなかった。話をしていく中で、こんな一言があった。「まずは自分！自分から楽しんで！そうしたら、利用者さんも自然と笑顔になってるよ」私は、はっとした。自分から楽しむ、それが必要だと気付けなかった。だから、この一言は心にグサッと刺さった。この言葉を忘れずに自分も楽しむことができるレクリ

エーションを考えた。試行錯誤の末、実際に行ったレクは成功した。笑顔になっている利用者さんが頭の中には残っている。この次の日から、「めんどくさいな」そう思うことが自然となくなった。

この時期に頭の中に思い浮かぶ言葉が1つあった。「笑顔の力」。たった1日の出来事で私は大きく変わった。

実は大きくかわることがもう1つあった。それがよさこいだ。3年間続けてきたよさこいがびったり当てはまるのだ。話はさかのぼり、1年生の6月、人前で踊ることは緊張ばかり。間違えないようにただ一生懸命踊った。まだ周りが見えず、がむしゃらだった。当時の先輩からは「踊ってるとき、楽しめてる？そんなんじゃない、見ている人は楽しくないと思うよ」今、考えるとその先輩は、だれがどう見ても楽しそうに踊っていた。どんな場面でもそれは変わらない。札幌でも、ボランティア先でも、練習でも。先輩は笑顔で踊ることを大切にしていた。その先輩につられ、周りも笑顔になっていった。

今年の6月、「自分から楽しむ」ことでチーム全員が楽しんで踊れた。観客の皆さんも笑顔になっていった。私たちが目指した姿にたどり着けた。実習とよさこいでの経験で成長をすることができた。介護にはマイナスなイメージがあった。今では実習、よさこいで利用者の方に、笑顔を見た私は福祉に魅了された。だから、その魅力を多くの人が知ったのなら、ノーマライゼーションの世界は広がっていくのだろう。だから私は、自分の経験を伝え、介護の魅力を知ってもらいたい。

初任者段階教員研修 1 年次研修(高等学校)

「一般研修」に参加して

北海道湧別高等学校教諭 加 藤 安香音

1 期 日 平成30年12月26日(水)

2 参加人数 168名 (家庭科8名)

3 会 場 北海道第二水産ビル

4 研究内容

(1) 講義・協議

「生徒指導力・進路指導力」

「ホームルーム経営力」

講師：北海道立教育研究所 研究・相談部

研究研修主事

内容：①児童・生徒理解の考え方

②問題行動等への対応について

③教育相談の方法

④ホームルーム経営について

⑤キャリア教育はなぜ必要か

⑥キャリア教育とは何か

(2) 講義・協議

「地域との連携」「教職員の服務」

講師：北海道立教育研究所 研究・相談部

企画・研修部 研究研修主事

内容：①保護者との連携

②地域や関係機関との連携

③部活動の指導について

④教職員の服務

(3) 講義・協議・演習「教科等指導力①」

「家庭科教育の現状と課題」

講師：十勝教育局教育支援課高等学校教育指導班

石川 博史 主任指導主事

内容：①家庭科教育の現状と課題

②次期学習指導要録について

③課題の交流

④自己課題の明確化

(4) 講義・協議「教科等指導力②」

『ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動』
の実際」

講師：十勝教育局教育支援課高等学校教育指導班

石川 博史 主任指導主事

内容：①「ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」の取組

(5) 講義・演習「教科等指導力③」

「授業改善」

講師：十勝教育局教育支援課高等学校教育指導班

石川 博史 主任指導主事

内容：①学校評価（観点別学習状況の評価）の意義

②主体的・対話的で深い学び及び目標と指導と評価の一体化を図る指導の在り方

③学習評価を踏まえた授業改善

④「指導と評価の計画」の作成（演習）

(6) 研修のまとめ

内容：①研修の振り返り

5 おわりに

全体会、教科別部会において多くの方々にご指導いただきましたことを感謝いたします。

特に、教科別部会は日頃から教科のことを家庭科担当教員同士で相談するのは難しい環境にあり、貴重な時間となりました。初任者同士で共有し、協議できたことは自己の課題を明確にし、具体的な解決策を得る機会となりました。

今回の研修で学んだことと、挑戦し続ける姿勢を忘れずに日々精進して参ります。今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

中堅教諭等資質向上研修（高等学校）

第Ⅰ期・Ⅱ期研修教科別部会（家庭科）に参加して

北海道ニセコ高等学校教諭 浅川 寛子

1 期 日

Ⅰ期 平成30年 7月26日、27日

Ⅱ期 平成31年 1月 8日

2 目 的

教育公務員特例法第24条に基づき、当該教諭等に対し、中堅教諭として必要な資質能力の育成・向上が図られるよう、講義や協議、演習等を通じて、個々の能力、特性等に応じて、教育活動その他の学校運営の円滑かつ効果的な実施において中核的な役割を果たすことが期待される中堅教諭等としての職務を遂行する上で必要な事項に関する実践的な研修を行う。

3 場 所 北海道立教育研究所

4 参加者 5名

5 運営者

十勝教育局教育支援課高等学校教育指導班

主任指導主事 石川 博史 氏

胆振教育局教育支援課高等学校教育指導班

指導主事 近藤 麻理子 氏

6 研修内容

【第Ⅰ期】

研修1「自己課題の明確化」

研修2「家庭科教育の現状と課題及び
新学習指導要領について」

研修3「『ホームプロジェクトと
学校家庭クラブ活動』の実際」

研修4「教育課程の編成・実施と改善」

研修5「主体的・対話的で深い学びについて」

研修6「『指導と評価の計画』の作成1」

研修7「『指導と評価の計画』の作成2」

研修のまとめ「教科別部会のまとめ」

※第Ⅰ期はホームプロジェクト、学校家庭クラブ活動の実践資料（いずれか1つ）及び共通教科家庭科目の年間指導計画（シラバス）を持参した。

【授業期間中の実践】

第Ⅰ期研修を終えて、1学年家庭総合での学校家庭クラブ活動として、ニセコ町幼児センター併設の子育て支援センターを訪問し、乳幼児交流を行った。事前学習では、保護者に対する質問票を各班で作成し、主体的に交流する方法として、手遊び歌の歌詞を生徒達が考え、練習した。交流は有意義な時間となり、交流のまとめとして学んだこと、感じたことをクラス内で各自発表した。

【第Ⅱ期】

研修1「授業実践の交流1」

研修2「授業実践の交流2」

研修3「指導計画の検証、改善」

研修のまとめ「第Ⅱ期研修の振り返り、自己の授業改善の方策や研修の成果について」

7 おわりに

第Ⅱ期研修では、授業期間中に実施した授業の内容、様子を20分程度のプレゼンテーション形式で発表し、改善点などについて協議した。石川主任指導主事、近藤指導主事からは、事前学習で作成した質問票を基に振り返りを行うこと、学校家庭クラブ活動として発表の時間を確保することをご指導いただいた。Ⅰ期・Ⅱ期研修を通して、高等学校家庭科の現状と課題、学習指導要領の趣旨を踏まえた指導のポイント、評価基準の作成及び評価方法の工夫・改善について、家庭科の指導の充実に向けての指導・助言をいただいたことを今後の指導につなげていきたい。

V 福祉教育等に関する報告

第18回「福祉に関する教科・ 科目設置校研究協議会」を終えて

北海道留寿都高等学校 山形孝宏

本研究協議会は平成30年北海道胆振東部地震の発生により開催が延期され、11月30日（金）に行われた。北海道高等学校長協会家庭部会副会長である、北海道札幌南陵高等学校長 佐々木淑子先生をはじめ、福祉科目を設置する道内の高等学校及び特別支援学校の校長、教諭合わせて29名が参加した。

(1) 基調報告

全国福祉高等学校長会理事である、函館大妻高等学校長 池田延己先生より「全国福祉高等学校長会理事会・総会・研究協議会」の伝達事項として、①「平成31年度介護福祉等に係る講習会」の開催について、②社会福祉・介護福祉検定の1級が今年度より実施されることについて報告された。また、本研究協議会当番校である北海道留寿都高等学校長 仲川敏幸より、次年度以降の北海道の福祉関連行事の当番校業務のローテーションについて報告があった。

(2) 基調講演『これからの介護業界の展望』

社会福祉法人 溪仁会

介護老人福祉施設 きもべつ喜らめきの郷

地域密着型介護老人福祉施設 るすつ銀河の杜

施設長 佐藤 秀幸 様

2020年代の日本の動向として、要介護者が826万人まで増加し、介護費用が約21兆円に増大すること、また介護人材は全国的に約34万人不足する事態が発生すると見込まれていること等、お話しいただいた。また、介護人材の確保対策として、①介護ロボットやICTの活用推進、②外国人介護人材の確保に向けた在留資格の見直し等の方向性についてご説明いただいた。講演の途中で、ご持参いただいた介護

ロボットを起動させて、コミュニケーションツールについての実演や、介助を行う際に腰の負担を軽減する装具等の試着を参加者に体験していただいた。意義深く貴重な研修の場となった。



(3) 授業見学『農業と福祉を融合させた授業の取り組みについて（発表）』

留寿都高等学校4学年（介護総合演習）

留寿都村は道内でも有数の農業地帯であることから、地域密着型介護老人福祉施設『るすつ銀河の杜』の協力の下、地元高齢者のQOL向上に向けて農業を題材としたケアプランの立案と実践（留寿都高校独自の『農福連携』）に挑戦したプロジェクト学習について報告した。

(4) 研究協議

学校内の福祉実習室及び福祉機器について見学・説明した後、情報交換会として①進路指導②教科指導、③生徒募集の方法について協議した。進路指導、教科指導については各校から特別な教育ニーズを抱える生徒についての指導方法について、特別支援学校の教員から助言いただく場面も見られた。生徒募集の方法については、定期的な学校説明会の開催や小中学校への出前授業等の実践、福祉を学ぶ生徒独自の奨学金制度の創設等の実践例も紹介された。

第3回 北海道地区高校生

介護技術コンテストの開催について

北海道剣淵高等学校教諭 柏 倉 早智子

1 コンテストを終えて

第3回目を迎えた北海道地区高校生介護技術コンテストは、8月24日（金）江別市文京台にある北翔大学7号棟の介護実習室にて行いました。

今年から、審査員と高齢者役のモデルを、一般社団法人介護福祉士会にご協力をいただき、実践に必要な「生きた介護」の視点で審査をいただきました。

また、観覧者数も年々増加し、札幌市、江別市、千歳市など会場近隣のみならず、北見市や士別市など、生徒が実習でお世話になっている遠方の施設からも、興味を持って見に来ていただきました。審査員をはじめ、来賓・観覧者の皆様からは、高校生の高い介護技術に驚いたことや、高校生らしい発想に加え、しっかりとした根拠に基づく介護技術の発表に感心したとの声をいただきました。

コンテスト終了後は、参加者が事前に撮影し、用意したビデオを使って学校を紹介したり、グループディスカッションをとおして、交流活動を行いました。広い北海道の各地より集まった生徒達は、同じ介護士を目指す仲間との一時を楽しんでいました。

今回の開催にあたり、多くの後援、協賛を賜りましたこと心からお礼申し上げます。

2 コンテスト結果と参加校

	学校名（学科）	生徒名
最優秀賞	北海道置戸高等学校 (福祉科)	中島悠華 浜名あおば 武田佳凜
優秀賞	北海道剣淵高等学校 (総合学科生活福祉系列)	武田優香 横濱直矢 鵜このみ
第3位	北海道留寿都高等学校 (農業福祉科)	佐藤麻圭 穂刈なみ 大黒莉来
参加校	江陵高等学校 (福祉科)	永井悠衣 安田明日美 湯木祥平
	函館大妻高等学校 (福祉科)	黒島柚菜 木村まゆ 小板優夏



【競技課題】

佐々木美智子さん（80歳女性）はレビー小体病による認知症があります。軽いパーキンソン症状により、多点杖を使用して歩行が可能です。夜間の幻視による不眠や不安が大きくなり、家族の要望で特別養護老人ホームへ入所しましたが、佐々木さんは、慣れ親しんだアパートで独り暮らしがしたいという希望を持って、過ごしています。昼食後に定期検診のため通院の予定があります。居室のベッドで休んでいる佐々木さんを玄関前のロビーまでお連れしてください。

【介護技術の審査項目】

- ・利用者とのコミュニケーションができたか
- ・プライバシーへの配慮ができたか
- ・個人を尊重できたか
- ・自己決定を尊重できたか
- ・自立へ向けた支援ができたか
- ・安全や安楽への配慮ができたか
- ・個人因子や環境因子に基づいた支援ができたか
- ・介護者同士の連携や役割分担が適切にできたか
- ・時間内に介護を終了することができたか
(介護技術7分以内 アピール2分以内)

第7回全国高校生介護技術コンテスト大会に参加して

北海道置戸高等学校教諭 水 谷 愛

第28回全国産業教育フェア山口大会「第7回全国高校生介護技術コンテスト」が、10月21日（日）に行われました。全国高校生介護技術コンテストには、開催県出場校を含め、地区大会を勝ち抜いた12チームが出場しました。

1ヶ月前に「事前課題」として、利用者様の基本情報（健康状態、心身機能、活動状況、個人因子、環境因子）、使用可能な物品、コンテスト会場図、当日行う介護内容などが示されます。生徒達は、その情報を基にして利用者様にとって最適な介護方法を考えます。また、今大会は事前課題の他、当日課題もあるため、課題を予想しながら練習を行いました。介護方法を考えるに当たり生徒達が最も大切にしたい介護は、北海道大会でも評価していただいた、利用者様の意思決定を大切にすること、保有能力を最大限に引き出す介護の提供です。

【事前課題】「昼寝から離床しベッドに座っている魚沼さんが、午後の誕生会に参加するため身なりを整えたいと介護者を呼んでいます。更衣介助後、居室内の洗面台まで歩行器で移動し、洗面台のイスへの着座を介助してください。」

技術コンテスト当日は、10分間の課題検討時間があります。そこで当日課題が示されます。課題検討室には参加生徒のみが入室できます。短い時間の中で、課題に対する介護方法や提供する介護の根拠、アピールポイントなどの最終確認をし、競技に挑みます。

【当日課題】「孫からプレゼントされた誕生日プレゼントに着替えたいと要望しています。皮膚が汗ばんでいるので、着替えの際に軽く拭き取ってください。」

〈参加生徒の感想より〉

適度な緊張の中で始まった競技では、3つのポイントを意識して行いました。

1つ目は、「自立と生きがい」です。洋服の選択を通して「自己決定」ができる声かけと「達成感」を実感できる取り組みを工夫しました。

2つ目は、「安心・安全面への配慮」です。筋力低下により、立位時にふらつきがみられるため、二人介助で安心して立位をとっていただくようにしました。また、姿勢の確認を行い関節の痛みがないか声かけを行い、負担を最小限にすることを意識しました。

3つ目は、「利用者の状況に応じた介護」です。魚沼さんから、昨日お孫さんにプレゼントされた服を着たいとの訴えがあったため、魚沼さんの思いを尊重できるように工夫しました。

残念ながら、時間が少し足りず最後まで行うことができなかったため悔しさが残りましたが、北海道代表としての力を発揮できたと思います。

〈引率教員の感想〉

生徒たちは、自分たちの今までの学びを遺憾なく発揮することができたと思います。全国の福祉を学ぶ生徒たちとの出会いも、貴重な経験になったと思います。



VI 各地区（ブロック）
家庭科研究会の
一年間の活動状況等

空 知 管 内

- ◇名称;空知高等学校家庭科教育研究会
 ◇運営母体;空知高等学校教育研究会
 ◇実施回数;1年に1回
 ◇会員学校数/管内学校数 28校/28校
 ◇会員教員数/管内教員数 57人/57人
 (実習助手等含む)
 ◇次年度事務局校;滝川工業高等学校
 ◆実施日時 平成30年10月5日(金)
 (参加者 18名)

(1) 総会

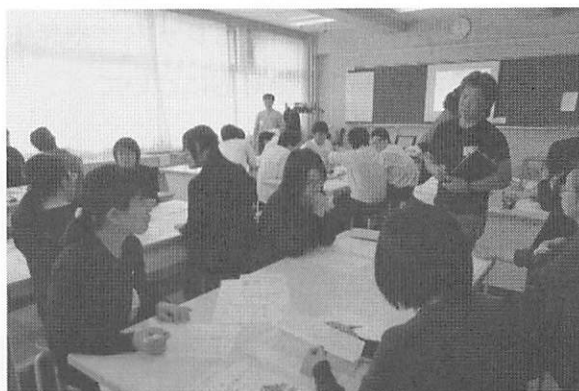
- ・平成29年度 事業報告・会計決算報告
- ・平成30年度 事業計画案・予算案
- ・平成30年度 会員・規約の確認
- ・事務局ローテーションの確認
- ・平成31年度 研究会の内容について

(2) 研修

「建築士による住教育出張講座」公開授業
 講師 一般社団法人北海道建築士会
 川上 裕一 氏 他2名

(3) 研究協議

- ・公開授業についての質疑応答、各校の取り組みや授業についての情報交換



石 狩 支 部

- ◇名称;北海道高等学校教育研究会
 石狩地区支部家庭部会
 ◇運営母体;高教研石狩地区支部家庭部会
 ◇実施回数;1年に3回
 ◇会員学校数/管内学校数 39校/70校
 ◇会員教員数/管内教員数 49人/107人
 ◇次年度事務局校;札幌白石高等学校
 ◆実施日時 平成30年5月8日(火) 38名参加

(1) 総会

- ・平成29年度事業報告
- ・平成29年度会計決算報告・会計監査報告
- ・平成30年度研究協議会計画(案)
- ・平成30年度会計予算(案)
- ・平成30年度役員一覧(案)・新役員紹介

(2) 研究協議

- ・実践発表

「ICTを活用した授業実践」

札幌南高等学校 教諭 高橋 あき

「2時間で行う被服実習+実技テスト」

札幌南陵高等学校 教諭 高橋 理緒

「家族分野におけるグループワーク」

市立札幌啓北商業高等学校 教諭 野村 良子

(3) 各ブロック情報交換・交流会

- ◆実施日時 平成30年10月2日(火) 28名参加

(1) 実技研修

「洗濯用の洗剤づくり～中性洗剤の合成」

講師 札幌琴似工業高等学校環境化学科

教諭 佐原 将彦 氏

(2) 各ブロック情報交換・交流会

- ◆実施日時 平成31年2月5日(火) 38名参加

(1) 講演 「成人年齢18歳改正にあたり

消費者教育に関する最新情報について」

講師 一般社団法人北海道消費者協会

教育啓発グループ主幹 道高 真理氏

(2) 研究協議

(3) 各ブロック情報交換・交流会

後 志 支 部

- ◇名称；第 37 回後志管内高等学校
家庭科研究会総会・研究協議会
- ◇運営母体；後志管内高等学校家庭科研究会
- ◇実施回数；1 年に 1 回
- ◇会員学校数／管内学校数 14 校／23 校
- ◇会員教員数／管内教員数 14 人／21 人
- ◇次年度事務局校；岩内高等学校

◆実施日時 平成 30 年 10 月 17 日(水)

9 名参加

- (1) 総会
 - ・平成 30 年度役員確認
 - ・平成 29 年度事業報告
 - ・平成 30 年度事業（案）
 - ・平成 31 年度当番校の確認
- (2) 研究協議
 - ・平成 31 年度全道家庭科研究協議会運営
研究員の確認
- (3) 研修 1：授業見学、講話
「小樽ソールフードあんかけ焼きそばを作る」
講師 小樽商科大学副学長 江頭 進 様
- (4) 研修 2：授業教材についての研究協議
 - ・家族領域の扱いについて
 - ・アクティブラーニングの取り組みについて
 - ・授業開きの取り組みについて
 - ・効果的だった教材内容等

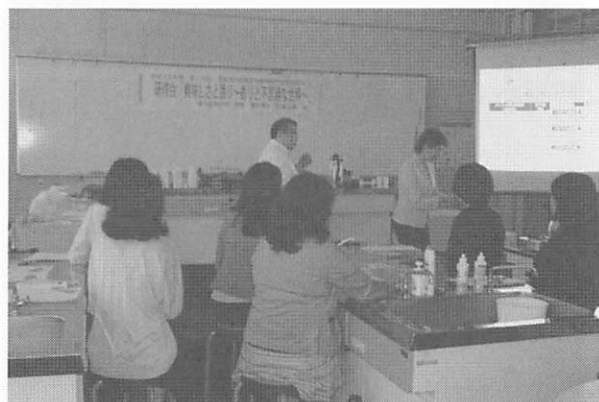


胆 振 地 区

- ◇名称；第 14 回胆振管内高等学校
教育研究会家庭科部会
- ◇運営母体；北海道高等学校長協会家庭部会
- ◇実施回数；1 年に 1 回
- ◇会員学校数／管内学校数 25 校／25 校
- ◇会員教員数／管内教員数 25 人／32 名
(講師 7 名含む)
- ◇次年度事務局校 苫小牧西高等学校

◆実施日時 平成 30 年 8 月 30 日(木)14 名参加

- (1) 総会
 - ・平成 29 年度事業報告
 - ・平成 29 年度決算報告
 - ・平成 30 年度事業計画（案）
 - ・平成 30 年度予算（案）
 - ・平成 30 年度役員
- (2) 研修会
「美味しさと香り～香りの不思議な世界～」
講師；東京農業大学
教授・農学博士 佐藤 広顕 様
- (3) 各校交流会
 - ・座学の授業で生徒が興味を示した物について
 - ・新学習指導要領におけるシラバスや評価
 - ・食アレルギーの生徒対応について
 - ・実習・実験について
 - ・新学習指導要領におけるシラバスや評価に
ついて（評価の観点をテストに表記してい
るか等）



日 高 管 内

◇名称；平成 30 年度日高管内高等学校教育
研究会家庭科研究会

◇運営母体；北海道浦河高等学校

◇実施回数；1 回

◇会員学校数／管内学校数 6 校／7 校

◇会員教員数／管内教員数 8 人／9 人

◇次年度事務局校；北海道静内農業高等学校

◆実施日時 平成 30 年 11 月 5 日(月) 8 名参加

(1) 研究協議 1

「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を取り入れた指導例」

次の事項を中心に、各校持ち寄った資料をもとに情報交換・意見交流を行った。

- ・アクティブラーニングの実施内容
- ・効果的だった授業・実習内容等

(2) 研究協議 2

「ホームプロジェクト

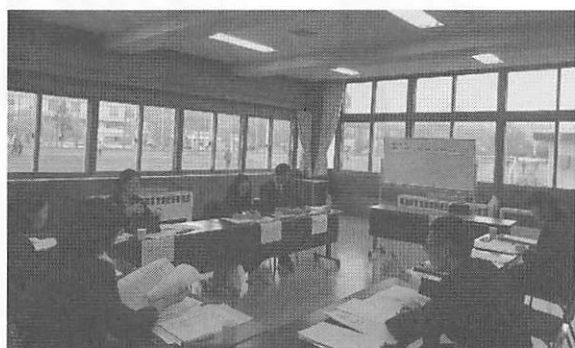
～各校の授業実践と工夫・課題について」

次の事項を中心に、各校持ち寄った資料をもとに情報交換・意見交流を行った。

- ・ホームプロジェクトの効果的な進め方、実践例など

(3) その他

- ・平成 31 年度以降の当番校の確認
- ・平成 30 年度家庭科研究協議会の報告
- ・平成 31 年度家庭科研究協議会提言者の確認
- ・平成 31 年度家庭科研究協議会運営委員の確認



渡島・檜山地区

◇名称；平成 30 年度渡島・檜山地区高等学校家庭科部会研究協議会

◇運営母体；北海道函館西高等学校

◇実施回数；1 回

◇会員学校数／管内学校数 26 校／29 校

◇会員教員数／管内教員数 44 人／44 人

◇次年度事務局校；北海道市立函館高等学校

◆実施日時 平成 30 年 10 月 31 日(水)12 名参加

(1) 総会

- ・平成 29 年度事業報告・決算報告
- ・平成 29 年度会計監査報告
- ・平成 30 年度予算案について

(2) 施設訪問

社会福祉法人聖パウロ会さゆり園

(担当) 家庭支援専門相談員 平原氏

(3) 研究協議

①生徒の興味・関心の強い実習・実験のアイデア、手応えのあった教材について

②主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)を取り入れた指導例

※上記テーマのレポート持参



上川・名寄地区

◇名称；上川管内高等学校教育研究会
教務部会家庭分科会

◇運営母体；上川管内高等学校教育研究会

◇実施回数；2回／1年

◇会員学校数／管内学校数 25校／30校

◇会員教員数／管内教員数 45人／50人

◇次年度事務局校；北海道旭川西高等学校

◆実施日時 平成30年5月15日(火)25名参加

(1) 総会

- ・平成29年度研修報告
- ・平成29年度会計決算報告・監査報告
- ・役員改選
- ・平成30年度研究協議会計画(案)・予算(案)
- ・平成31年度北海道高等学校家庭科教育研究協議会提言に関する現状報告

(2) 研修① 講演

「最近の若者の消費者行動と消費相談から」

講師 北海道立消費生活センター教育

啓発グループ主幹 道高 真理氏

研修② 演習「ディンプルアート制作」

講師 特定非営利活動法人グリーン

マザーズ理事長 石田 明美氏



(3) 研究協議

各校の課題と取組について

◆実施日時 平成30年8月7日(火)15名参加

(1) 研修① 講演

「新学習指導要領に向けた

観点別評価等について」

講師 北海道教育庁十勝教育局

教育支援課高等学校教育指導班

主任指導主事 石川 博史氏

研修② 講義・演習

「子どもの発達と保育者の役割」

講師 名寄市立大学保育学科

准教授 傳馬 淳一郎氏

(2) 研究協議 各校の課題と取組について

◆実施予定 平成31年3月 役員会

留萌管内

◇名称；留萌管内高等学校家庭科教育研究会

◇運営母体；留萌管内高等学校家庭科教育
研究協議会

◇実施回数；1回／1年

◇会員学校数／管内学校数；6校／6校

◇会員教員数／管内教員数 4人／4人

◇次年度事務局校；北海道羽幌高等学校

◆実施日 平成30年11月13日(火)3名参加

(1) 研究協議

「各校の実態と課題」

(2) 公開授業

「やさい不足を解消しませんか？」

ー簡単においしく食べるコツを身

につけましょう」

講師 旭川大学短期大学部教授

柴山 裕子 様

(3) 研究協議Ⅱ

「公開授業について(質疑・応答)」



イラスト；北海道当別高等学校

家政科2年保育コース

東 沙 弥

宗 谷 管 内

◇名称；宗谷管内高等学校教育研究会家庭部会
研究協議会

◇運営母体；宗谷管内高等学校教育研究会
(管内校長会組織)

◇実施回数；2年に1回

◇会員学校数／管内学校数 7校／7校

◇会員教員数／管内教員数 7人／7人

◇次年度事務局校；浜頓別高等学校

◆実施日時 平成30年11月20日(火)7名参加

(1) 研究発表

「論理的思考力の育成～新聞を使った取組～」

発表者

北海道枝幸高等学校 武田 若葉 教諭

(2) 研究協議

「各校における実践と課題」

各校における実践と課題について協議し、

今後の授業に役立てる。

(3) 講 話

「新学習指導要領について」

講 師

北海道教育庁十勝教育局教育支援課

高等学校教育指導班主任指導主事

石川 博史 氏

オホーツク管内

◇名称；オホーツク管内高等学校
家庭科教育研究会

◇運営母体；オホーツク管内高等学校
家庭科教育研究会

◇実施回数；1年に1回

◇会員学校数／管内学校数 25校／25校

◇会員教員数／管内教員数 29人／29人

◇次年度事務局校；興部高等学校

◆実施日時 平成30年10月31日(水)14名参加

(1) 講 演 「家庭科教育の現状と課題

(新学習指導要領)」について

講 師

北海道教育庁十勝教育局教育支援課

高等学校教育指導班主任指導主事

石川 博史 氏

(2) 総 会

・平成29年度事業報告および決算報告

・平成30年度事業および予算審議

・事務局校の確認

・その他

(3) 研究協議

「消費者教育」について、実践報告および
情報交換

十 勝 管 内

- ◇名称；十勝管内高等学校教育研究会家庭分科会
- ◇運営母体；十勝管内高等学校教育研究会
- ◇実施回数；2回／年
- ◇会員学校数／管内学校数 23校／24校
- ◇会員教員数／管内教員数 40人／41人
- ◇次年度事務局校；幕別高等学校
＜全体会＞

- ◆実施日 平成30年6月6日(金) 20名参加
- (1) 総会 (2) 研究協議会

「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

- ◆実施日 平成30年10月19日(金) 24名参加
- (1) 講座「避難所運営ゲーム(HUG)を使用した防災学習」

講師：帯広市役所防災係 石山 亮太 氏

- (2) 研修 「ミニ椅子(花台)制作」

「JW-CADによる住宅設計」

「間取りキットを用いた私らしい住まいの設計」

- (3) 研究協議

- ①ブロック研究協議会報告
- ②全道高等学校家庭科教育研究会報告
- ③新学習指導要領について報告
- ④全道家庭科教育研究会運営委員について
- ⑤管内家庭分科会当番校・幹事校

ローテーションにつて

＜ブロック研究協議会＞

テーマ：「生活課題を主体的に解決できる生徒の育成を目指した家庭科教育の実践」

Aブロック

- ◆実施日 平成30年9月3日(月) 6名参加

- ◆実施日 平成30年10月19日(金) 7名参加

HPについての勉強会、分野の振り分け、評価の工夫、学校説明会の授業についてなど

Bブロック

- ◆実施日 平成30年7月27日(金) 7名参加

講義・実習：「もしも」に備える食

～災害時でもいつもの食事を～

帯広調理師専門学校職員より

各学校授業実践交流

Cブロック

- ◆実施日 平成30年7月26日(木) 8名参加

内 容 Bブロックと同様

釧 根 地 区

- ◇名称；釧根地区高等学校家庭科研究会
- ◇運営母体；釧根地区高等学校研究会
- ◇実施回数；1回／年
- ◇会員学校数／管内学校数 21校／21校
- ◇会員教員数／管内教員数 23人／23人
- ◇次年度事務局校；中標津農業高等学校

- ◆実施日 平成30年10月26日(金) 17名参加
- (1) 総会

- ・平成29年度事業報告
- ・平成30年度事業計画(案)について
- ・平成31年度事務局、当番校について

- (2) 体験実習

「被服技術検定を取り入れた授業づくり」

講 師：弟子屈高等学校

佐藤 美保 教諭

実習内容：本校での取り組み

被服検定の4級 DVD

(手順の確認)

被服検定4級の体験実習

- (3) 講 義

「新学習指導要領について」

講 師：北海道教育庁十勝教育局

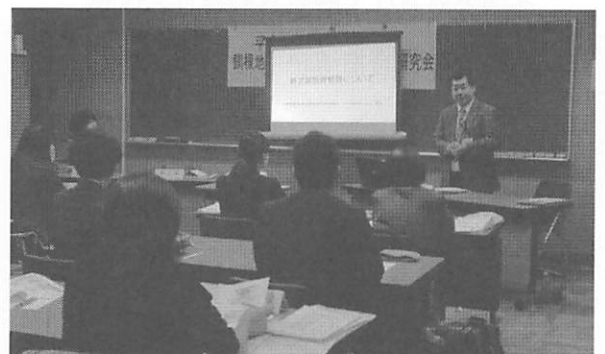
教育支援課高等学校

教育指導班主任指導主事

石川 博史 氏

- (4) 研究協議・助言

- ・各校の教育課程における家庭科科目の編成について
- ・体験実習の実施状況について
- ・各校での課題(3校から)



VII 特 別 寄 稿

「泣いた赤鬼」

～青鬼も泣きますが、幸せです！～

北海道札幌南陵高等学校長 佐々木 淑 子

「よく続けてこられたなあ～」が今の正直な気持ちです。そして、これまで私に関わってくださったすべてのの方々に感謝でいっぱいです。生徒たちはもちろん、保護者の皆様方、地域や行政機関の方々、教育関係者、先生方、そして、家族・・・本当に本当に有難うございました。

昭和56年春、北海道で教師の道を歩むことになった経緯には両親の助言がありました。

大学卒業、あこがれの「警視庁婦人警官」試験合格！「家庭科教員」としても二ヶ所で登録！どっち？今は亡き父の言葉「警官も重要な職業だ。でも警察にお世話になる人を一人でも減らすのが教育であり教師なんだよ。」（よしっ！教師になる！）次は母の出番「家庭科なら自分の故郷に近い環境で教えた方がいいと思うよ。」（よしっ！北海道へ渡る！）で・・・38年です。

初任校、真狩高校では生涯学習教育の農業を、倶知安高校では専科家政科と全日制・定時制・通信制の家庭科を、道研や本庁高校教育課では福祉・看護・家庭各科の産業教育を、江別高校では職員室と全道校長協会家庭部会事務局を、洞爺高校では学び続ける閉校を、三笠高校では地方創生の食物調理科を、そして札幌南陵高校では学校課題の解決を、と働かせていただきました。教諭から指導主事へ、教頭や校長と役職が変わっても、この教職の道を歩き始めた最初の「家庭科」を忘れることはありませんでした。

たまに教え子たちに会うと、その時々々の初心に戻らせてもらえます。先月も教え子たち数名と会って話しができました。（さっそく？・・・）

「キュウリ半月切り2mm以下50枚合格！繋がっていたらはじかれ、枚数にしようと無理に剥が

そうものなら絶対見破るヨシコセンセ！鬼だったよね！」「ホント、鬼！枚数が点数って言うから家で必死に練習したよ。だから毎晩のおかずはキュウリの酢の物！」（鬼の話しはさらに加速）「それに、たくさん宿題が出たのも家庭科じゃない？夏休み『地域貢献グループ活動』、冬休み『ホームプロジェクト』、発表があったから全員やらざるを得なかった。」「俺は『幼児虐待について』の課題が難しかった！高校で一番考えたかも知れない。」「やっぱヨシコセンセは鬼！」（面と向かって「鬼！」と言う？）「でもさ、この間〇〇君に会ったら言ってたよ。娘にキュウリ切り見せたら『パパスゴーイ！』って言われたんだって！にやけて自慢してた。」「やる前はヨシコセンセは鬼だ！やりたくない！って思ったけど、やったらやったで家庭科何か楽しかったね。」（さらに会話は続く・・・）

「授業中に携帯いじって見つかった時、『わかりやすい授業にしようと思って一所懸命準備してきた人間に対して失礼！』ってすごく怒られた。あの時から二度と携帯はいじらなかった。」

厳しい家庭科教員の裏にある想いを、教え子がわかってくれた事実こそ、「家庭科の授業で本物の生き抜く力を育みたい！」と真剣に考え日々取り組んだ自分へのご褒美！と受け止め、私は幸せ満腹になるのです。家庭科を学ぶ生徒たち、教育に携わる先生たちのために、なんとか働いてきたこの年月を誇りに思います。

◇無職になったら・・・『心のやさしい鬼のうちです。どなたでもおいでください。おいしいお菓子がございます。お茶も沸かしてございます。』 ～浜田廣介作「泣いた赤鬼」より～

家庭科の重要性

北海道当別高等学校長 田村俊行

私は、特別寄稿などと立派なことが書けるほど家庭科教育と関わった訳ではありません。実際に、家政科を持っている当別高校に赴任し、ほとんど初めて家政科の教育活動について考えたというのが実態です。

私の教科は国語です。現在、国語という教科を通して求められる大きな力の一つが、「考え、伝え合う力」です。他人と深い議論をしたことがない人は、ちょっとしたことですぐにトラブルになり、相手との関係を修正することができません。そして、それは時々、より大きなトラブルに発展します。そうすると一層、修正が困難になります。そういう子供たちに、コミュニケーション能力を求めることは、私は酷なことではないかとさえ考えています。苦手な人とも仲良くし、そのためにはコミュニケーションをとらなければならないとしたら、それは私なら苦痛以外のなにものでもないと思います。

嘆いてばかりはいられません。このことはこれからの日本社会に大変重要なことですから、対策をしっかり考える必要があります。私は、読書の推進だと考えています。

そもそも考えるための語彙を持たなければ人は考えることをしなくなります。何が起ころうと、通常の状態から少しでもずれていることを「やばい」という人がいます。いいことでも悪いことでも、「やばい」らしいです。

どういう感情をどういう言葉で表現しているかを想像力を持って体験することが必要であり、その言葉が他者とほぼ共通の意味を表すことにより、コミュニケーションが可能になるわけです。そのためには、本を読むことに尽きます。

言語の習得とは一つ一つの言葉と人の生活の1対1あるいは1対多の関係を理解し、それを表現できるようになることです。

そのために、幼児期の読み聞かせが大変重要だと考えています。本校家政科保育コースでも実践していますが、子供たちの言語体験を豊かにし、それと言語をつなげ、コミュニケーションの種を子供たちに植えることが言語の習得過程に必要なのです。

また、家庭に本が一冊もない状況も環境としては望ましくありません。親が家庭で本を読まないのに、子供たちには読むことを強要し、挙げ句の果てに、無理矢理読まされたにもかかわらず「感想文」を書かされることが、子供たちの読書離れの原因の一つであるとも言えます。言語の習得は幼児期だけのことではありません。あえて言うなら生涯に渡って継続すべきものです。ですから、家庭における本に触れる環境作りはことのほか重要です。

本の大切さを力説しましたが、私はこういう「人としての基本となる力」を養うことが「家庭科」の力だと、この三年間の家庭クラブや家庭科の教育活動を通じて理解しました。家庭科のある校長先生にそのことをお伝えしたら、まさにその通りだと言ってくださいました。家庭科教育だけではなく、国語教育も、積極的に幼児教育に関わることに、より豊かな学びが創造されていくのだろうと考えます。

勝手なことばかり書いてしまいましたが、家庭科教育の可能性をより広く高く見ていくことが、これからの教育には必要ではないでしょうか。

編 集 後 記

私が家政科のある学校に勤務するのは実は2校目です。現在は当別高校だけですが、かつては全道各地に家政科があり、そのうちの一つが紋別高校家政科でした。私はそこで教頭として勤務しましたが、紋別市内の高校の統合再編により、家政科はその後閉科しました。校長になり、全道でただ一つの家政科に赴任したのはなにか不思議な縁を感じます。

当別高校の校長となり、校長協会家庭部会や家庭クラブの役員として、様々な活動に関わることにより、家庭科の先生方の熱意を感じました。

また、この「こです」の内容にあるとおり、すぐれた研究・実践が脈々と継続されていることに感心しました。

家庭科に関する学科を設置している学校は少なくなりましたが、家庭科の研究・実践と先生方の熱意とその連携を減退させてはならないと強く思うようになりました。その象徴が「こです」であり、「いとなみ」であると思います。担当者は日常の業務に加え編集や原稿依頼など、苦勞も多いのですが、この伝統をなくさずに、これからの家庭科教員に引き継いでいただくことを願い、編集担当を代表してのご挨拶とします。

こです HOKKAIDO 編集担当校

北海道当別高等学校長 田 村 俊 行

北海道高等学校長協会家庭部会　こです　HOKKAIDO

発行日　　平成３１年３月３１日
発　行　　北海道高等学校長協会家庭部会事務局
 (北海道江別高等学校)
編　集　　北海道当別高等学校
印刷所　　社会福祉法人　共友会　札幌福祉印刷
 札幌市西区西町北１５丁目５番７号
 TEL　(011) 667-7771
 FAX　(011) 667-9750

こです HOKKAIDO とは

「こ」 Collected papers	集 録
「で」 Domestic Science	家庭科
「す」 Studies	研 究

家庭部会が研修して、それをまとめあげる
こーして仕上げることを、でかすと解釈し
北海道は、「こーですヨ」という意味です